

追うのではなく並びたい。

korotuki

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

腕も良くて人格者なオリ主人公くんが報酬と情に絆されてホイホイ戦場に駆り出され、ため息を吐きながらも操縦桿を握る話

アイアンサーガはいいぞおジョージィ…（ねつとり）

pixivでも別ユーザー名で投稿しています。

アフリカ戦争編

目次

007	006	005	004	003	002	001
90	75	61	45	31	15	1

アフリカ戦争編

001

☆【変わり者の傭兵仲間】

「——ん？」

太陽の白と砂漠の茶色しかない場所にそのBMは立っていた。オレンジと白で配色された金属質の巨大なロボット。バイエルングループの試作機「ヘラヴァハンマー」である

一時期は「火星深部から排出された」というロマン溢れる説明で話題となったが、とある記者によって「地球産なのに火星産としていた」というスキヤンダルが発覚した可哀想に機体である。

それでも両手の二問の砲台や各部の射出装置、そしてこのBM自体から発せられる熱量とレーザーの威力が下がる事はなく。燃料代が高くつく事を見なければ非常に優秀な機体である。

そんな高価かつ優秀かつロマンに溢れたBMの搭乗部に乗っていた人物は、赤髪紫目の男性だった。「砂漠の熱さ+機体の熱放射」をもろともしない高級クーラーが取り付けられた操縦席で悠々とドリンクを飲んでいた男の目はリーダーに映った友軍機のコードを見遣っていた。

「友軍機の反応……この信号はベカスさん……でもちよつと違うな。機体を変えたのか？」

今出て来た「ベカス」という名前は、この男と同じBM——Battle Mech（バトルメック）の略称——乗りではあるが優秀なパイロットを表すA級ライセンスを持つ彼とは違い、どこにでもいる一般的なC級ライセンス持ちの傭兵である……だが、件のベカスはA級の彼に勝るとも劣らないパイロットスキルの持ち主でもある。しかし万年C級なのは彼のスキルを上が把握していないのかそれとも――

「機体コードは……よ、読めない。まさかの『機密』系統？万年金欠のベカスさんが？」

機密（大体なんかヤバイ機構やシステム。またそんな事情を抱えているBMの系統）持ちの機体なんてまた随分と物騒なのに乗り換えたなど思いながらも通信機能をポチポチと弄り、ベカスの機体に通話を入れる彼——芦名絢斗（あしなあやと）は「そーいや盗賊団が出てるとか何とか聞いたような……」と思いながらも通話が繋がるのを待った。

『——って事で、俺はいつちよ盗賊たちを倒してくる』

「…アンタが乗ってるその白い機体も、一瞬映ったピンクの髪も、まあ見なかったことにしますけど。これだけは言わせて下さい——相変わらずですね」

『おい！そりやどうゆう意味だ!!』

「そのまんまの意味だよ！大体アンタ無償の手助けが多過ぎんだよこのならずり者流（笑）の伝道者が！」

画面の向こう側に映った白髪の男ベカスに向かって思っ切り毒を吐く絢斗。普段は穏やか（設定）な彼がここまで言うのは、ベカスの性格のことについてだった。

日頃からベカスという人間は依頼の報酬を極東料理と甘苦で出来た味付きの爪楊枝に溶かすというどうしようもないやつなのだが、それに輪を掛けて酷いのが彼のお人好しっぷりだ。依頼主が女性や貧困者だった場合はかなりの高確率で無償で依頼を受けるし、場合によっては自らの財布を投げ打ってまで依頼を完遂しようとする。

一番厄介なのは彼が人からの行為純感に疎野郎いということだ。察せないというわけではないのだが限り無くそれらに対する察しが悪い。

『オイオイ。流石に言い過ぎだろ？』というか、お礼はたっぷりと——』
「どーせ飯一食分だけとかだろ!?安過ぎんだよ！自分を安売りするな高く行け!!」

『お、おう……』

話の流れからしてまた割りに合わない人助けをする気だと察した彼は憤るが、空返事しか返さないベカスであった。

「くっツ!!ああもう！座標データ送って下さい。急行しますから！」

ここで『バカな奴だ』と通信を切りなにも見なかったことにするのは非常に容易いが、流石に先輩に死なれるのは目覚めが非常に悪い綱斗は唸り出すような葛藤の声を出しながらも『救援する』選択肢を取った。

『わかつ——ん？ちよつと待て』

「…何ですか。機器の故障ですか」

『いや、そうじゃなくてだな…手伝ってくれるのか？』

「…？そりや助けますよ。いかにアンタが乗ってるそのBMが高性能で、アンタの腕が並のA級以上でも、物量には敵わないだろ？」

『——イヤイヤイヤそういう話じゃなくてな』

「まさか、『俺を助ける義理なんかないだろ』とか言うつもりですか？」

『…：そうだ。俺とお前にそんな義理なんて——』

意地っ張りなのかそれとも自分以外の奴を巻き込むのは彼の流儀に反するのか、何故か救援することに抗議し出したベカスに対し『本っ当にこの人』は歪みそうになる口角を隠しながら仕方なく『正当な理由』を出した。

「んじゃあ『貸した金をキチンと返済してもらおう』って事で」

『へ？』

「カジノで貸した10万ゴールドに、極東料理の店で渡した7千5百ゴールド。後俺からパクった実家の味付き爪楊枝の代金2千5百ゴールド。しめてぴったり丁度11万ゴールド。まあ盗賊共が盗った宝を幾つかちよろまかせば足りるんじやないですかね？」

『——』

実際はもつとある

「理由としてはこんなもんです。で、返答は？これでもAランクなんですんじよそこの盗賊に遅れは取りませんよ？」

『ハア…OKOK。降参だ——場所はお前がいるところからしばらく離れた位置にある貧相な村だ。詳細はデータで送る。あと、もしかしたらおてんばなお嬢ちゃんが襲って来るかもしれないから、その時は俺の名前を出してみる。黙って通してくれるかはわかんないけどな』

「了解…あつそうだ。何か補充したいものはありますか？友人価格で持って来ますよ」

『いや、別に——あー。そう、だな』

折れたベカスとの予定の擦り合わせもほぼ終わり、思い付きで補充物資を持ってこようとして、ベカスに何か必要な物がないかとベカスに聞いたら、何故か途端にベカスの歯切れが悪くなった。

『その、だなあ…プリンを2つぐらい』

「……プリン？北京ダックとか、甘苦とかじゃなくて？」

『あ、それは欲しいな。是非頼む』

「ええ？……まあ、了解。精精良いのを買ってきます」

絢斗はベカスが『プリン』と言った瞬間にモニターの端で一房のピンの髪が跳ねたことを見なかったことにしつつ、通話を切った。

「妹…いや、ないか。たぶん迷子の女の子でも拾ったんだろうなあ……はあ」

ほんとうに色々アレなベカスに呆れながらも彼はプリンと甘苦と北京ダックを買いに市場へと向かった。

因みに買い物の帰りに悪の組織「ノイジーバット」の首領リーゼロッテに襲撃されたが、軽くあしらった。

「村は…ああアレね。確かに情報通りボロい場所つとと、まだ人が住んでるのに失礼か」

絢斗はバイエルングループの高機動型戦車「ミーティア」に乗りながら村へ向かっていた。本来レーシングゲームにしか顔を出さないミーティアが砂漠を走っているのはかなりシニールだが、Aランク最速とも揶揄されるスピードは伊達ではなく、みるみる景色が過ぎ去り、村が大きくなっていった。

——ついでに、赤と青の女性的なフォルムが特徴的なBMも視認した。

「【バルキリーA】に、【バルキリーR】？ヴァルハラ製とは珍しい」

絢斗が今言った通り、【バルキリーシリーズ】——高い操作性とその見た目から、特に女性からの支持が強い機体郡。様々なバリエーション

がある——はこのアフリカから遠く離れた北欧地区に本拠を構える
ヴアルハラが製作、販売している機体である。確かに北欧から遠く離
れたここアフリカではまず見かけない機体である。

『その戦車……止まりなさい!!』

リーダーに映ったのか、こちらの方へ振り抜きながらオープンチャ
ンネルにて停止を促した。

特に反発する理由もないので指示通り停止し、懐から身分証明兼預
金手帳のライセンスカードを懐から取り出し始めた。

『何か、身分を証明できるのはある?』

銃口は下げられているがこちらに向かってBM用の大口徑レ
ザー銃を突きつけられつつも落ち着いた様子で身分証を手を持った。

「OATHカンパニー所属の傭兵、芦名絢斗だ。ベカス——白髪に赤
い目をした男の救援に来た」

『……盗賊の支援にでも来たの?』

「は?と、盗賊の支援って……俺は正式な企業に属しているから、そんな
ことしたら即刻除名だ。やりたくても出来ないし、俺はそこまでバカ
じゃない」

『うツ……ゴメンなさい』

「……分かれればいい」

妙なやつかみを退け、無事謝罪を勝ち取った絢斗は村に入ることな
くリーダーに映ったベカスの信号目掛け走って行っ——

『私つたらまた……もう間違えないうって決めたのに……!』

眩きが偶々マイクに拾われたのか、少女の悔恨の感情が窺い知れる
声が聞こえて来た。……どこか見に覚えのある絢斗は、他人の気がしな
かったため一つアドバイスを送ろうと戦車を止めた。

「——ねえ」

『えっ……あ——、ゴメンなさい!!』

「いや、それはいいんだけど」

バツが悪そうな声音の少女に向かい——

「若い頃のミスは仕方ないと思うぞ。俺も君ぐらいの時は味方のB.M.溶かした事があるし」

『と、溶かした？いい、いや有難うございます…？』

「うん。頑張れ若人」

そう言うのと絢斗は機体を反転させ、今度こそ【バルキリーA】から去って行った。

『若人って…あの人も結構若いと思ったんだけど』

——尚、最後に聞こえた少女のツツコミは聞こえなかった。

その後暫く走って行った先で、絢斗はベカスとベカスのB.M.【ウアサゴ】と合流した。

☆【成る程、大体分かった（大嘘）】

「こうやって顔を突き合わせるのは結構久々ですね」

「だな。…：…にしても、相変わらずいろんな機体乗ってるな」

「俺は「選ぶ事が出来ます」からね。手札は多い方がいい」

「取り敢えず、頼りにさせてもらうぞ？」

「ハイハイ。で隣のその子、いや「その人」は…」

ふと、このクソ暑い砂漠でかくのとは別の意味での汗をタラリと垂らしながらも絢斗はチラリとベカスの隣にいる少女を見やった。

小さくも『幼い』とは感じさせない立ち姿。

ピンクの髪はとても滑らかで、まるで絹か、シルクのような印象を受ける。

顔は幼いながらも『帝王』のような威厳を感じさせる雰囲気。

瞳は赤と青のオツドアイ。

絢斗はふとベカスの方を向いた。

「…ベカスさん。護衛の依頼でも受けました？」

「へ？いや、受けてないぞ？そもそもC級の俺が護衛なんて上等な依頼なんて受かられる訳ないだろ」

「ま、まあそうなんですけど…」

『ちよつと待っててください』と絢斗はベカスと少女に背を向け、懐か

ら携帯端末を取り出した。その中のファイルから「世界の重要人物リスト」を開き、その一番上の人物の写真を凝視した。

(…やはり似ている。イヤイヤイヤまさかこんなアフリカの砂漠にいる訳がないだろ常識的に考えて——)

絢斗は何度も首を捻った。もし、万が一ここに「居る」と仮定しても彼女——いや、彼の人がここにいる理由はハッキリ言っても「ない」筈だ。

(取り敢えず知らぬ存ぜぬを貫いてみせる…? いやもうここはズバツと聞いてしまった方がいいのか…ひとまず、様子見してみるか)

一先ず急に素性を聞くのはまずいかもしれないので、取り敢えずここはベカスに合わせることにした。もしかしたら「護衛任務」じゃないだけで「特務」とかそうゆう「言えない」類の事なのかもしれない可能性がある事を考慮した結果である。

「もう一度聞いときますけど、隣のこの子は?」

「だ〜か〜ら。妹だつて言ってるだろ? な〜」

「ええ。意地悪で優しいお兄ちゃん?」

(うわあ〜嘘臭え)

内心でそう思いつつも絶対にそうとは言わなかった。

「…取り敢えず補給品。渡しときますね——ベカスさんのB.M。燃料は不明だったので調達できませんでしたが、ビームのエネルギーパックや銃弾は補給できましたよ。後家の爪楊枝と北京ダックです。普段からのご愛用ありがとうございます」

「おっサンキュー——つと、ウンウンこの味だ。相変わらずいい味だな」

「どーも。是非日ノ丸まで来て貴方の口から言ってくれ」

ベカスの分を渡し終えると…絢斗はキリリつと顔を引き締め、まるで中世の騎士のように恭しく少女の前にひざまづいた。

「猊——君の分だけど、お兄さんの要望通りに、プリンを買って来ました。なるべく良いのを選びましたが…口に合うかどうかはちよつとわかりかねるから、勘弁してね?」

最後に一礼して、自分の上着についた砂を欠片も彼女にこぼす事な

く立ち上がった。

「…お前ロリコンか？」

「違う！目上——じゃなくて、女性を大切に扱うのは常識だろ！」

「ああもうとにかくどうぞ！」と最初とは打って変わって雑に手渡されたプリンを受け取った少女は、数秒絢斗を不思議そうに見た後フワリと花のように笑い……

「ありがとうございます。大切に食べさせてもらいますね？」

「…どういたしまして」

一瞬見惚れた絢斗は我に帰った後雑に返事をする、そのまま自分のBMへと戻っていった。

「…なんかおかしいな。やっぱりロリコンか？」

「多分違うと思うわ」

心底可笑しいと口を緩める少女と、基本的に男女平等な態度で相手に接する後輩に一つの疑惑を持ったベカスは、そのまま盗賊団討伐のためヴァサゴに乗り込んだ。

☆【遭遇（故意）戦】

太陽は遥か遠くに沈み、すっかり夜の帳が落ちた砂漠。そんな夜に芦名絢斗は機体の上で堂々と仁王立ちして、その手には特大のメガホンが握っていた。

『えーゴホンゴホン。マイクテストマイクテスト——大丈夫そうだな。あーコチラ無名のC級傭兵のベカスと著名なA級傭兵の芦名絢斗だ』

『説明に悪意を感じ（ブツリ）』

『——気を取り直して、諸君らは包囲（二人）されている。今すぐ武装を即時解除して投降されたし』

端的に言えば盗賊団に対する『降伏要請』である。

絢斗もベカスや少し寄った村の住人から盗賊団の所業は伝え聞いているものの、真正面からドンパチやるのは時間と弾薬の無駄なので避けたいところなのだ（因みに降伏したら降伏したらでしつからと然るべき場所に輸送し然るべき罰を受けてもらう心算である）——とい

う訳で、ロクにしたこともない演説で無血投降を求める絢斗なのだが
.....

『.....』

基地からはゾロゾロと無数のBMが這い出て来た。その機体の手には各々の武器や銃器が握られており、極め付けに絢斗やベカスのコクピットではロックオンの警笛音が鳴り響いていた。

『おい絢斗。アチラさんはやる気みたいだぜ?』

『...みたいです。じゃあ分らせてやりましょう』

茶化すようなベカスの声に答え、目を温和な物から感情が冷めたような乾いた目へ変化させ、滑り落ちるようにラヴァハンマーへと飛び乗った。

スリープ状態だった機体を起こし、火器管制システムを起動。拡散ビーム弾やウィーゼル弾といった主要な武装の弾薬がセットされていることを視認し、ハンドルやフットペダルがキチンとフィットすることを確認した。

「じゃあ、溶岩弾で蒸し焼き地獄になると思うけど——悪く思うなよ?」

ラヴァハンマーのツインアイが緑に光り、所々に設置された冷却用の外付けホースから溶岩のような流動体が流れ始め周りの外気温が一気に上昇し、気温の差によって「ジュウウ」と言う音と共に蒸気が昇る。

「ベカスさんは近距離戦をお願いします。俺は中距離でアシストします」

「了解さて——行くぞ!!」

ベカスのヴァサゴがブースターを一気に吹かし先手必勝とばかりに敵陣へと切り掛かった。

「これぞシャナム流——ならず者の剣!!」

動き自体は乱雑だが、流麗な動作で次々と敵を斬り伏せていくベカス。近寄れば剣で、離れていれば銃やビームで、微妙な距離ならブースターで近づいて切るといふ隙のないキルゾーンを形成していくベカスとヴァサゴ。しかし敵も元を辿れば一国の兵士である。集団行

動の「行」ぐらいまでは理解しているようでヴァサゴの背後を取ろうとしたり遠距離での小隊規模による波状攻撃を仕掛けようと動き始める。

……が、今の彼は一人ではない。

「おーおー相変わらず気持ちの良い暴れっぷりな事で。じゃあ、俺も！」

小隊規模で固まっていた敵が一気に橙色のビーム群に貫かれた。

『コクピットは外してやる！』

ラヴァハンマーの主武装の拡散ビーム砲を放ったままグルリと回転。見事に周囲を撃ち抜きながら……しかし宣言通りコクピットには当てず、周囲のBMの大部分を沈黙させた。

「さあまだまだ行くぞー！」

続いて放たれたウィーゼル弾がBMへと降り注いだ。此方もコクピットだけは外していた——本来は追尾性能があるこの弾を機械(オート)に任せるのではなく態々マップやレーダーを駆使し自らの手(マニュアル)で設定し、確実に弾を当てながらも頑なにコクピットだけは外す彼の腕が窺えた。

「いい腕してるな！相変わらずで安心したぜ」

「其方こそ！近接戦で一本取れるのはいつになるやら!!」

敵を殲滅する関係上自然と互いをカバーするため背中合わせとなった2機は軽口を交しつつ、確実に撃墜スコアを増やしていった。

「あー畜生！これでスコア測定器さえ生きてりゃボーナス間違いなしなのによお!!完全にペアだ！」

「壊れてたんですか!?!うっしなら数えてたアンタの分俺に加算しときますね！」

「なっ!?!おい待てこの野郎!!」

そんなハイスクールで交わされる様な下らない会話をしながらも、彼らの周囲にはBMの残骸と、コクピットから這い出て来たパイロット達が見た己のBMだった物を見た悲鳴で溢れかえっていた。

『くそっ！なんだコイツら強え!?!』

『散開しろ！白い方のは近接主体だから遠距離から物量で押し潰せ』

！』

『無理です！遠距離持ちの橙色の方がカバーして——ウギヤアアアア
！！』

『くそっ！ヴィムがやられた！』

ついに二人はアジト内部へと侵入。変わらずベカスは近接主体。
絢斗は遠距離主体で撃滅していった

「歯応えがない！地上戦艦とかないのか!!」

「リーダーにそれっぽい反応ありましたよ——つと、そこそこいい機
体だ。リーダー格？」

あいもかわらず軽口を交わし合う二人の前にAランク級のBMへフ
レンチナイトとへマスケツティアが現れた。どちらもバランスが
取れたいいBMである。

『おいお前ら、なかなか良い機体に乗っているな』

公開回線にてへフレンチナイト側から通信が送られてきた。その
声は嗜虐心に満ちており、通信越しでも分かる程度にはゲスな手合い
であることが窺えた。

「…それはどーも。一応投降してくれると助かるけど？」

『ハッ！何ボケたこと言ってやがる!!——お前のそのBM。俺が使っ
てやるよ!』

一種の宣戦布告をした後に、フレンチナイトはウアサゴの方へ向
かって突進する。

「ご指名ですよ。そいつは任せます」

「別にいいが……大丈夫か？そのBM遠距離特化だろ？」

「ハン！舐めないで下さいよCランク？」

「——後で覚えてろよ？」

フレンチナイトの槍による一撃をやり過ぎしながらウアサゴは遠
く離れていった。

「覚えたらってヤツですね。じゃあ、こっちも始めま——おつと！」

ウアサゴとの別れを済ませラヴァハンマーを振り向かせた瞬間、今
まで沈黙を保っていたマスケツティアが巨大ナイフを閃かせた。

危なげなく避け距離を取ると同時に拡散ビームを放つが、遺跡跡と

思われる柱を蹴り三次元的な動きで回避された。

「やるな！どうやらリーダー格なのは当たりみたいだ！」

そう言いつつも、切り掛かってきたマスケツティアの斬撃を嘲るように踊るような動作で回避する。そして、徐々に溶けて行く相手の装甲を視界の端に納めながらも拡散ビーム砲を発射する。

「このBMは特別でな！周囲に高熱を発し続けるから、早めの投降を勧める!!」

『…………その気は、ない!』

ビームの間を縫うように避けるマスケツティアが、オプション装備なのか腰のホルスターから取り出したハンドキャノンに向け不意に発砲する。

バガン！！！！

音だけで威力を察せられる程の轟音と共にBMの親指大の巨大な弾丸が迫る。

「ヒュウー！いいもん持ってるなあ!」

絢斗もただ馬鹿正直に喰らうわけにもいかないのです、左腕の装甲を弾丸へ差し出す形で受け流し無事弾を弾いた。

しかし当たれば高ランクBMでも胸板に風穴が開く事必死の弾丸を受けたまるつきり無事とはいかず、まるで肩が脱臼したかのようにラヴァハンマーの腕が七割方滑落した。

「チッ！このBM高いんだぞ!!」

そう愚痴るとラヴァハンマーの破損した腕を鞭の様にしならせ、至近距離回避けようのなかつたマスケツティアに打つける。元は破損していると言えど高ランクBM特有の超装甲は伊達ではなく、バガツシヤンと派手な音を散らし内部フレームのいくつかを打ち壊し吹っ飛んでいった。

「——これなら修理するより新しいパーツ買った方が安いか」

ケーブルや電子基板が剥け出しになり激しく火花を散らせる腕を見ると、絢斗は特に躊躇いもなく腕のパーツをパージさせ、隻腕となったラヴァハンマーで構えを取る。

目には砂煙しか見えなくとも、そのレーダーには未だ敵機の反応が

残っているのだ。時折よそ見をし両腕分のエネルギーを右腕一本に集約させ、威力と充填速度を向上させる。

「……………そー！」

微かに知覚した不確かなナニカを頼りに、拡散ビーム砲を向け発射する。すると、砂煙から飛び出してきたマスケッツティアの装甲を、少し貫く。

『ツ!?ウオオオオ!!』

自身の気配と期待の稼働率を下げての奇襲を呆気なく打ち破られ瞠目するマスケッツティアのパイロットだが、即座に切り替え両腕の大型ナイフを突き出しブースター全開で突貫する。自分のBMの耐久値がダンチである事から次の一撃が最後のものだからという事と、緋斗の乗るラヴァハンマーに一切の近距離武装が付いてない事から遠距離よりも近距離の方が勝率の高いといった二つのことから、彼は「至近距離からのナイフ突き刺し」という実質カミカゼアタックに踏み込んだ。

「ツ……………」

一見愚かにも見えるが実際この攻撃はかなり有効である。元々ラヴァハンマーは重厚な装甲と強力な遠距離武装にものを言わせた一対多数の掃討戦を得手とする機体で、前述の通りこのBMには近接戦用のコンバットナイフ一本すら持っていない。詰まるところ緋斗がこの攻撃を避けるには自壊覚悟でオーバーストするか、達人級の技量を会得してカウンターの投げ技を極めるか…それこそ、機体を瞬時に乗り換えるぐらいしかないだろう。

極限の状況下から。マスケッツティアのパイロットの視界は色素が抜け灰色に染まり、BMの機動からメインカメラから流れる小石の一つ一つを視認できる程のスローモーシヨンな——所謂《ゾーン》の様な感覚に陥っていた。

そんな視界の中ではマスケッツティアの大型ナイフが徐々に敵機のラヴァハンマーへと向かっていくところをハッキリと見ていた。パイロットの脳内にインプットされたラヴァハンマーのデータから、この一撃を回避することは不可能だと判断しニヤリと口を歪めた。

「…………っ！《チェンジ》!!」
そう思った瞬間。

マスケツティアのパイロットの視界からラヴァハンマーがのまっしげな白と橙色の装甲が一瞬で視界から突如として掻き消え、次いで現れたへ赤と白にカラーリングされ、ラヴァハンマーとは違いどこか女性的な印象を与える腕が現れて――

「ハアアアア!!」

烈火の如き雄叫びと共に、優麗な装飾のなされたへ騎士片手剣がマスケツティアに向かって袈裟懸けに振るわれる。

『な……アア!?!』

見事に上半身と下半身が真つ二つに別れたマスケツティアと、今し方起きた現象が理解出来ないパイロットはその視界とレーダーに『今まで戦っていた機体とは全く別のBM』を映しながら爆散した。

「……はあ」

剣を振るった姿勢のまま固まっていた紅の機体――近中距離特化BM【ガラハッド】ご存知アイサガ内で一時代を築いた罪深き機体。一定の時期見なかった日がない程のアーナ採用率を誇った通称【ガラハゲ】と絢斗は残心を解き、その手に握られたへ騎士片手剣を勢い良く地面に突き刺す。

「格下相手とはいえ、油断しすぎたな……おれもまだまだ甘いってことか」

そう絢斗――【ワン・オブ・サウザント一人千色】の芦名絢斗は、静かにため息を吐き、己の反省点を自覚した。

☆【戦艦戦】

「だークソツ。いるとか聞いてたけどどこまでデカいのは想定してないぞ!!」

絢斗と別れた後、無事にフレンチナイトと搭乗者のチャラけたパイロットを爆☆殺したベカスはアジトの最奥にて盗賊団の首領との一騎討ちに臨んでいた。

とってベカスは幾ら強力とはいえBMとしては通常程度のサイズでしかない【ウアサゴ】。対して相手は小規模の軍隊であれば旗艦としても務まるであろう巨大さの【陸上戦艦】である。子供と大人を通り越して最早像とアリンコの戦いの様相を呈しており、ウアサゴを駆るベカスはチャージが終わり次第ビーム砲や搭載された小型ドローンによる射撃戦を仕掛けているが中々決定打が与えられず、また盗賊団駆る陸上戦艦も素早いヴァサゴに対し攻撃を当てられず場は一向に進展のないイタチごっこと化していた。

「ベカス！そっち終わった…ってうわ想像よりもデカイ」

そこへタイミング良く芦名絢斗が操る「ガラハッド」が現れる。通信にて友軍の無事に一瞬安堵したが、次いでガラハッドのツインアイに映った敵の陸上戦艦に気付き軽く慄いた。

「良い所に…ってお前やられたのか?」

「…ええまあ。最後の最後に自爆特攻じみた事されました」

「そうかそうか！残念だったな!!」

まるで出来の悪い後輩を慰める様にバシバシと叩くウアサゴと、反論できない為甘んじてそれを受けるガラハッド。ここだけ見ると仲の良い先輩後輩だが、ウアサゴのコクピットの中でベカスが「愉悦!」とばかりに悪い顔をしていたのを同じコクピットに相乗りしていたピンク髪の少女は見逃さなかった。

「ねえねえ。お兄ちゃんのお友だちさん?」

「なんですかスロ…お嬢さん?」

「私のお兄ちゃん。今すっごく悪い顔してたわよ?」

「…なっ!？」

「撃墜スコア全部俺のモンにしてきますね！」

「」

決死の戦場である筈なのにまるで所属組織の母艦の中にいるかの様な軽いやり取り。そんな生温い物を見て敵が何も思わない訳もな
く……

『きつさまらバカにしてるのか!? ミサイル斉射! 粉々にしろオ!!』

盗賊団長の号令により飛翔した雨の如きミサイル群。普通のパイロットは絶望でしかない光景だが、今ここにいる二名は生憎「普通」とは無縁の存在だった。

方や才能あるものしか辿り着けない【Aランク】に位置しながらも更なる戦果を上げ、企業から「Aランクを超えた者」として【A^{ダブルエース}Aランク】の特設ランクを賜った芦名絢斗。

もう片方は平凡なCランクの三流傭兵でありながら恐ろしい程の剣の冴えを見せ、その他の戦闘技術も高水準な何故Cランクに位置しているのか分からない謎のパイロットベカス・シャーナム。

二人は此方に迫るミサイルの雨を見遣ると――

『別に、舐めてなんかないさ』

奇遇にも一語一句同じになった返しに二人は顔を合わせ笑い合うと、タイミングを図ることもなく互いに左右へ機体を跳ねさせる――
!

「ハッ! しつかりと捕まってるよマイリトルシスター!!」

コクピットの座席にしつかりと腰を据え。ベカスはウアサゴのブースターを一気に解放し、「翼」を持たないウアサゴを天に羽ばたかせる!

「ならず者の呼吸――壱の型!」

以前絢斗と一緒に読んだ昔の極東の漫画を思い出し、絢斗と共にトレーニングルームにて面白半分^に練習した必殺剣技: 余談だが「訓練室をそんな遊びに使うな」と管理人にお叱りを受けた。

閑話休題

そんな遊び心でできたこの技。生身で繰り出すなら技名通り薙刀を振るうかのように広範囲を薙ぎ払う技だが、今回のベカスは人よりも遙かに巨大なBMでそれを行う。……しかも剣に見立てて使う武器は、平時は決して近接戦に使われることのない——

(…何故この凡人は剣技を鈍器で繰り出そうとしておるのだ?)

ベカスの妹(暫定)は内心そう呟く…そう、必殺剣を繰り出すはずのベカスが取り出したのはビームソードではなくビームライフルだった。無論それはスロカ…妹の幻覚ではなく、コクピット内に設置されたウオサゴの状態を表す画面には、正しくウオサゴの右腕に銃が収まっていることを如実に表している。

しかし武器を間違えたことに気付いてないのか、はたまた狙い通りなのか。ベカスは銃の発射トリガーをへ押しっぱなしにする。

律儀にパイロットの捜査を受け付けたウオサゴが、ライフルのトリガーを引く。これまた律儀にトリガーを引かれたビームライフルが素直にビームを出す。

もちろん狙いなんてつけていないので明後日の方向へビームが向かっていくが、ベカスはそれを意に介さず頬をニヤリと釣り上げ——

「——薙切り！」
なぎぎり

次の瞬間『ビームを放ったまま剣の様に振るった』勿論銃口に追従する形で放たれていたビームもその軌道を曲げ、軌道上にあるミサイルを撃ち…否、斬り捨てていく。

「ハハッマジか！とっさの思いつきだったが丁度良く、嵌ったなっ!!」
そう。ベカスはビームライフルのビームを射撃用ではなく、極長のビームソードとして運用していた。早いところ〇Zガンダムのハイパービームサーベルである。無論Z〇ガンダムのそれとは違い一瞬しか持たないが…ベカスにとって当てるだけでいいミサイル群など一瞬だけで十分だった。少なくとも何処ぞの極東武帝に一発当てる

よりは簡単だ（20—6の悪夢）攻撃が当て難いときHPが多いとかではなく、ガッツが凄まじかった。作者は十回はやり直した記憶あり
「おらよ!!」

瞬く間に縦横無尽に斬撃を張り巡らせ、ライフルが焼き付く前に全ミサイルを斬り払う。ウアサゴの周囲には斬られたミサイルが次々と爆発し、ウアサゴを明るく照らしていた。

「な、なんなんだアイツ……!!」

ミサイルの逆光によって対照的にウアサゴが暗くなり。陸上戦艦に乗っていた搭乗員には、唯一爛々と光るウアサゴのツインアイとシルエツトが、やけに禍々しく感じた。

「さーて、絢斗のヤツはどう乗り切る……?」

コクピット内でそう溢したベガスの目線の先には、紅い軌跡を奔らせながら空中を飛び回るガラハッドと、それを追う無数の飛翔体だった。

「チイ!!思ってたよりも誘導性と弾速が速い……!!」

一方絢斗は、ひとまず速さで引き離しあわよくばそのまま振り切れないかと思ひ暫くドッグファイトを繰り返していたが、SSランクの機体の高速機動についてくるという思ってたよりも優秀な物だと判明し。

「ならこれでツ……無理か」

軽く焦りを覚えながらも再び振り切るために急旋回ブレイクを試すが、ほぼ直角の急旋回だったにも関わらず付いてくるミサイル群を見て、やはり振り切ることは不可能だと察する。

「これ使うと全体にガタが来るからあんまり使いたくないんだけどな……!!」

だが背に腹は変えられないと溜息をつくとき、一息にガラハッドを『ミサイル群の方へと』向き直らせ――

「……GO!!」

ブースターを点火させ、一気に距離を詰め武器類を撃つていく。パルスアームガンや頭部光子パルスを撃ち込む。勿論数は減ったがそれでもその数は未だ無尽蔵。そのまま激突——

「【帝騎システム】起動!!!」

——はせず、一瞬にしてガラハッドが掻き消える。

「……ちだー!」

続いてミサイル群の背後から再びガラハッドが出現し、主武装の爆射武器【帝国の光】を撃ち放つ。

ビームなのか弾丸なのかよく分からない閃光が敵を薙ぎ払うが、撃墜出来たのは眼前の数十本のみ。未だ彼の周囲には彼をつけ狙うミサイルが四方から迫っていた。

「ヒュー♪お代わりには困らなそうぞ何より!」

そう言った絢斗は再び【帝騎システム】——低距離の空間跳躍テレポルトを連続して行使する帝国工業独自の特殊機構——を連続発動。次から次へと残光を残しながらミサイルとミサイルの隙間を縫う様にテレポルトしていきながら、次々とミサイルを蹴散らしてゆく。

「ゴイツで、最後っ!」

【帝騎システム】の限界時間が過ぎる頃には、彼の視界からはミサイルは一つ残らず無くなっていた。

「…数々の戦場で猛威を振るった【ガラハゲ】の異名は伊達じゃないっ
てか」

感慨深げに脳内にて一時期ほぼ全てのBM関係者から蛇蝎の如く嫌われていた現在の搭乗機に冷や汗を流す…確かにガラハッドはSランクの中でも別格の強さを誇るが、それは比較的軽い部類に入るガラハッドには少々過剰気味な重武装によつて生まれる反動を誤魔化すテクニックと、常人にはマトモに使えない【帝騎システム】を使いこなせる卓越した空間把握能力が必須である。それを先程の様に華麗に舞う様に動ける時点で、絢斗の技量が窺い知れた。

『おっ。無事捌けたみたいだな』

「そつちこそ…というかアレまだ覚えてたんですね」

『おう。遊郭編で記憶が止まってるからまた読ませてくれよ鬼○の刃』

「そうなんですか？分かりました実家に來たらまた貸しますね○滅の刃」

『…そんなに面白いの？』

『ああ面白いぞ？もう数十年前の漫画らしいけどな』

(…正直内容がハードすぎるから仮にも見た目幼いこの御方に進めてもいいのか迷うな)

「ま、まあ取り敢えず——ッ!!」

しかしそんな漫画談議も長くは続かず、ウアサゴとガラハツドのリーダーに熱源反応が映った。そのままの軌道では二人まとめて激突するので、二人揃って軌道上から逃れる。

ブウォン!!!

2人が避けた熱源…いや光弾は、ウアサゴ及びガラハツドに勝利得る程の特大サイズで、仮に直撃すれば機体の装甲関係なく自身の体よりも大きな風穴が開けられていたのは想像に難くない。

『ッ!どうやら彼方さんも、痺れを切らした様だな!!』

「みたいですね…ベカスは敵艦の武装の破壊を優先的に。装甲を貫く事は余り考えなくて大丈夫です!」

『応!でお前は?』

「——艦首を叩きます!!」

2人の機体合わせても、瞬間火力が最も高いのはガラハツドの主要武器「帝国の光」だが、それを持つとしても某バスターライフルの様に真正面から排除するのは困難である。

そこでせめて視認性の代わりに防御を薄くした艦首を狙う。

万全の態勢ならば最悪「帝騎システム」を駆使して正面から敵の攻撃やら砲撃を避け、一気に近付きぶつ放せばいいのだが、件の「帝騎システム」はつい先程発動させたばかり。冷却時間クールタイムを経ればまた使えるが、それを無視して使えば最悪空中分解である。

そのため先ず絢斗はベカスに、自身を狙う敵の武装解除を要請した。敵の攻撃を減らす事が出来るし、絢斗自身も落ち着いて狙撃を行

うことが出来る。

『よし。そうと決まれば……』

「攻略、開始ですね！」

……因みにだが2機で陸上戦艦を攻略するのはハッキリ言って自殺行為である。

しかしそんなこと知るかとはかりにガラハッドは【帝国の光】に次弾を詰め込み始め、ウアサゴは実体剣の調子確かめる様にクルリと回すとブースターを吹かせ、一気に接近する……！

『撃て撃て！即座に撃墜しろ!!』

マイクが公開通信になつてることに気付いてないのか、首領がそう号令したと同時に主砲副砲問わずに砲撃銃撃爆撃様々な攻撃が降ってきた。

急な攻撃だが砲手は戦艦に向かうウアサゴに脅威を感じたらしく。ガラハッドの方には大して攻撃が来ず、またウアサゴとそれを駆るベカスは、前者は謎が多いが間違いなく高性能機。後者は前述の通り腕の立つパイロットだ。

光弾は避け、銃撃は盾で逸らし、砲撃と爆撃は剣と銃によって迎撃する。

またガラハッドもウアサゴ程では無いが、そこそこのスピードで行っていた。岩から岩へ、物陰から物陰へと隠密性を意識しつつもベカス1人に任せるわけにはいかないと最大限の速さで進む。

それを繰り返していると……

「……ロック・オン」

【帝国の光】を単発射撃モードへと切り替え、コクピット内で目標補足完了のピピツという簡素な音が響き、撃ち抜ける準備が完了していた。

「ベカス。狙撃準備完了した…いつでもいけるぞ」

『了解だ！こつちもすぐ離脱する』

宣言通りベカスは直ぐに踵を返し、即座にその場から離脱していく。

絢斗の耳には撃退出来たと勘違いしたクルー達の歓声が聞こえてくるが、彼は冷静になる為息を吐き、トリガーに手を掛け――

「――排除開始」

橙色の閃光が陸上戦艦に迫り、艦首を粉々に砕いた。

☆【依頼の対価】

「おつ。ここが倉庫みたいだな」

「ですねー（キンツ　…丁度開きました」

「…贅沢なマスターキーね」

「首領は倒したからOKじゃないか？」

無事陸上戦艦を破壊したベカスたち一行は、BMを降りてアジト内部を探索していた。狙いは勿論盗賊団が溜め込んだ財宝目当てだ。つい先程見つけた一際重厚な扉の鍵をたたつ斬り、強引に解錠したところである。

内部へと入った3人を迎えたのは、数えるのもバカらしい程の金の頭陀袋の数々と、いかにも高級そうな調度品の品々だった。

「成る程…どうやらアイツら、あの村だけじゃなくて他のところからも略奪してみたみたいですね」

「らしいな…連絡頼めるか？」

「オーケーです。なるべく元の持ち主な戻れる様に掛け合いますよ」

そう言うと絢斗は携帯端末を取り出すと連絡を取り始める。

「はい。俺です…ええ、撃破数から分かる通りそこその規模の盗賊団を潰しました。どうやら敗残兵の集まりだった様で…溜め込んだ財宝を見つけたので採算して、俺らの依頼料とは別に元の持ち主達

に渡れる様に……ハイ……」

そう担当の人物と連絡を取り合いながらも2人の邪魔になると思ったのか絢斗は部屋から出て行った。

「……持っていないの？」

少女は言外に「倒したのはお前なんだからお前のものぞ？」とベカスに伝える。実際盗賊団や野良賞金首を撃破した際の相手が溜め込んだ金銀財宝は基本的に撃破した本人に所有権が移る為、少女が言ったことは何も間違っていない。

しかしベカスに取ってそれは「大間違い」だった。

「いや…俺は別に、これで充分」

そう言うベカスは、自分の足元に転がっていた金貨を一枚手に取りニヤリと笑い返す。

それは記念コインとして作られている古代の金貨を模したもので、金の含有量が高い為それなりに高い値がつくが…正直今回のベカスの働きからすると不相応にも程がある金額だった。

しかしベカスは本当にそれだけで良いらしくそのまま部屋の中にあつた椅子に座り掛け、腰ポケットから味付き爪楊枝を取り出していつもの様に噛む…前に、少女に向かって照れ臭そうに後頭部を撫でながら言った。

「まもなくあの姉妹がくる。彼女たちがすべて

村人に返すはずだ」

「ふーん…バカがお金儲け出来ないのは本当みたいね」

「それだとあの二人だけじゃなく俺もバカ扱いなんだが？」

「そう言ってるでしょ？お兄ちゃん」

「…つたく、酷い妹もいたもんだぜ」

そう与太話をしていると、再び扉が開き絢斗が戻ってくる。携帯端末は既に通話が切られ耳元から離れているので、どうやら連絡は終わったらしい…どこかホクホク顔でそう言い、椎茸お目で財宝の山を見渡した絢斗だが本来金に困窮している筈のベカスが何の反応も示さない事に違和感を抱いた。

「お待たせしました…向こう側からは好きなだけ持ってけとのこと

す。俺は一先ず燃料代に色をつけて……ってベカスさん報酬は？」
「ああ、問題ねーよ。俺はこの硬貨一枚で充ぶ「お兄さん？」…どうした妹ってうおっ!」

「……………ほう？」

カツコつける為に軽く目を瞑りながらそう答えようとしたベカスだが、妹に呼ばれ軽く目を開けると、目の前には軽く首筋に青筋を立てた絢斗がこれまた恐ろしい形相でベカスの前に立っていた。

「ベカス。俺作戦前に言いましたよね？「自分を安売りするな。報酬はきっちり受け取つとけ」って」

「い、いや俺はこれで十分だから……」

「俺の借金はどうするつもりだコノヤロウ」

「ああいやそれはだな……」

言い訳するように両手を上げながら後退するが、元々狭い部屋ではその分部屋の隅に到達するのは早く。あっという間に隅へと追い込まれてしまった……気さくで細かい事は大抵流せるベカスだが、目の前で目を煌々と輝かせ此方を貫くのではないかと思う程の眼光を発する後輩の視線からは逃げられなかった。

「つとと、俺だってただの達成料を受け取ったわけじゃないぜ？ホレ」

「…それへアヌビス記念コインですよね？」

弁解するためにポケットから取り出したコインを出すベカスだが、絢斗はそれを見て尚…いや寧ろそれを見て余計に深い溜息をついた。「確かにそれは貴重なモノです。骨董品としての価値以外にも元から金属の含有量が多いから物資的な価値もあります。流石先輩妙に目敏い」

そう言う軽く口元を緩ませる絢斗。その様子を見て「これイケるかも知れない」と思い勝利を夢想するが、「…ですが」という絢斗の声によつて遮られる。

「…今この砂漠では、へワカvs反ワカ連盟の戦争が起こっているのは知ってますよね？」

「？勿論だ。というか俺たちはそれで飯を食いにきたんだろう？」

「——仮に…仮にですよ？」

やけに念入りに前提を繰り返した絢斗は、軽く声を抑えながらも切り出す。

「ベカスさんがワカの質屋に行った時にそのメダルを出し、その店の店主が反ワカ連盟に血族や親しい友人が殺された事情がある人だったら……アヌビスバカクソ強いゲロビ主砲を持つ未実装機体。とあるクエストでのビーム発射シークエンスでのアニメーションは必見とかいう反ワカ連盟の象徴が彫られたコイン見せたらどうなると思います?」

「……殺されるな」

簡単に絢斗の言った状況と、その後の未来を簡単に予見出来たベカスは軽く冷や汗を流す。これ簡単に言えば「自らの前で仇を象徴するナニカを出す」という行為だ。実際やられたらベカスでもブチ切れる自信がある。なんならイエスも右の頬を打った後に「左も差し出せ」と言っただけで再度打つ程である。

「それに今この戦争は膠着……悪く言えば泥沼です。長く続いている分犠牲者も多いでしょうから……今みたいな状況の人はそこそこの人います」

そう言い軽く肩を竦める事によって、話を締めた。因みにベカスは冷や汗を流している。そりやそうである。なんせ何となしに選んだ報酬が特大の地雷だったのだ

「なんで、報酬的にも世間的にも……こっちの方がいいと思います」

言い終わると絢斗は財宝の山へと歩いて行き、上に置いてあった小さい金のずだ袋を取り出しベカスへと渡した。

「いや……だがなあ……」

未だに未練がましく報酬金を減らそうとするベカス相手にまた溜息を吐く。内心「もうコイツ財宝の山の中に埋めてしまおうか……」と考える自分の中のデビルを抑え込みながらも、彼は再び思索する。

(…正直俺への借金はどうでもいいんだ。ゴールドは正直言っただけで有り余るほどある)

Aランク故に普段の月給と偶に入る指名依頼程度で遊んでいける程には金がある絢斗。正直ベカスからの数十万ゴールドなんて端金

なのだ。

(それよりも問題はこの人が「無償で依頼を受け続ける」という事が問題だ……) ブブブブブ…

「……ん？」

シンプルにベカスを心配する絢斗だったが、そんな折に携帯端末が震えた。

差出人は不明。件名は――

「――まあ、それがアンタの信条だつていうのなら否定はしません。…けど今後はもっとよく考えて信条に従って下さい」

「お、おう」

急に踵を返しベカスからの離れた絢斗は、そのまま数点の物資を自身の頭陀袋に放り込むと、そのまま部屋を出て行ってしまった。

「どうしたんだ？アイツ…」

困惑気味にたった今絢斗が出て行った扉を見つめるベカス。しかし「気にしすぎてもしょうがないか」と結論付けると、ふと自身の手握られた金の頭陀袋を見遣る。

「……………」

それとなくベカスはその袋を宝の山へ戻そうとするが、その直前で手を止め――ポケットの中へ収めた。

(あそこまで口酸っぱく言われちゃあ…聞いとかなくちやな)

「…さて、俺は今から北アフリカ最大の都市へカイロへと行く。そこでワカ軍の主力と合流するんだが…どうする？」

ベカスは背後へ振り返ると、己の妹(仮)へと問い掛ける。すると彼女は悪戯っぽく笑い…

「もちろん一緒に行くわ。私の目的地もちょうどその近くのな――あとプリン100個の貸しがあるの、忘れてないわよね？」

「…アンタは悪魔か？」

そんな言葉を交わしながら、二人は共に――若干少女が後ろにいる――部屋から出て行った。

「…助けてもらったのは、確かだからな」

「ん？なんか言ったか？」

「いえ。何も？」

絢斗の後を追いかける為少々早歩きになるベカスの後ろで、スロカイはマントの下で携帯端末を弄っていた手が止まる。

チラリと一瞬だけ画面を見ると、彼女は満足したような顔をして、端末を再びマントの内側へと仕舞い込んだ。

☆【次なる依頼とその報酬】

「ああ寒…ほんと砂漠程過ごし難い気候はないな。昼は暑くて夜は寒いなんて」

カイロへ向かう絢斗、ベカス、そして謎の少女の3人組は砂漠内のオアシス内で一夜を明かしていた。夕食では絢斗のおにぎりをベカスが一瞬の隙を突いて奪い取り、結果ベカスVS原作主人公絢斗オリ主人公の剣術対決が勃発するという一幕もあったが、今はすっかり就寝時間となり、各々の機体や設営キャンプに籠り睡眠を貪っていた。因みに今現在は絢斗が見張りのために一人起床しレーダーを見つめながら警戒している最中である。

しかし、そんな絢斗の背後から「シャク…シャク…」という砂漠の砂を踏み締める足音が響いてきていた。

「……………丁寧語を使った方がいいですか？」

「要らぬよ。万が一彼奴に見られたら面倒くさい」

「寧ろ俺からしたらなんでベカスさんが貴女の顔を覚えてないのが不思議なんですけど……………」

「まあ、確かにな。恐れ跪く凡人は数入れど。あそこまで——親身に接してくるとは思わなかった」

「——褒められてるのか、貶されてるのか分からない評価ですね」

「褒めているぞ？」

絢斗と、その背後に近づき絢斗があらかじめ設置しておいた椅子に

座った少女は、まず上記のような軽い話題から会話を展開した。

少女はベガスと共にいた頃のような愛らしい様子と口調は鳴りを潜め、今は絶対的な「上位者」の様な威厳に満ちた様子で絢斗の会話に応じていた。

「で、俺になんの用ですか?——機械教廷現教皇〔スロカイ〕」

「うむ。まずはこのペンダントを見てくれ」

少女：スロカイは懐から銀のペンダントをパカリと開き、その中に仕舞われた写真を見せた。

「…これは、血族か誰かですか?」

「想像に任せる」

それを見た絢斗は何処となくその写真の人物の人相が目の前の少女と似ている気がした事からそう質問したが、軽く躲される。

「えと…この人を探して欲しいとか。そんな依頼…という解釈でいいんですか?」

少女の表情が後ろめたいそれでは無かったので権力争いの為の暗殺はなさそうだと予想した。

「相違ない。その通りだ」

「俺の手助け要ります?だって貴方…」

「ほぼ世界最高レベルの権力者でしょ?」と言い掛けた絢斗の言葉を塞ぐ様に、スロカイは軽く肩を竦めて見せる。

「今回は所謂『お忍び』というやつでな…余の力を使つての実力行使や敵の排斥なら兎も角。本来の立場を使つての強権や恫喝はしたくないのだ」

「…成る程」

通りで本来教皇を守る立場である筈の「教廷騎士」達が居ないわけだと内心燻っていた疑問が一つ解消された絢斗は、手を組み合わせ頭の乗せ場所とし頭を固定し考え込む。

(となると使えるのは本当に少女としての立場のみか…そりや依頼もするだろう)

家や学校で親や教師を探すのとは訳が違う。へカイロへ向かう道中にて依頼してきた事からその探し人がカイロの何処かにいる可能

性が高いが、それでも北アフリカ最大の都市でたった一人の人間を探すのは大変に手間が掛かる。少なくとも一人の少女で成すには荷が勝ちすぎる行為である。

「俺は何をすれば？」

「独自に写真の人物を探してもらいたい」

「……それだけ？」

「ウム？ああそうだが？」

「えつーと、こう……ダブルエース「へA A」ダとしてのネームバリューを借りたい」と

か……では、なく？」

「？そんな物に頼りはしない。あくまで自分の力で探し出したいのだ」

「……あっそう」

「それで……受けるのか？受けないのか？」

スロカイはそう言う、「まさか断るとか言わないよなあ？」と言わんばかりの眼光で、絢斗の目を真っ正面から射抜いた。

……正直、絢斗からしたらこの依頼を断る理由は特にない。勿論この依頼には前述の通り広い北アフリカから人を探し出すという大変さはあるものの、依頼主から「独自に調査しといて」と言われているので、極論依頼主に「探してる探してる」と嘯き全く探さないとすることも出来る……勿論生真面目な絢斗はそんなことをするつもりはないが。

以上の理由からして特に断る理由もなかった絢斗はスロカイの目を見据え、返答した。

「分かりました……んじや、この電子契約書にサインを」

いそいそと携帯端末をスロカイの前に翳すと、立体映像が展開され『SIGN』と上部に書かれた電子書が現れた。

その光景に特に驚く事もなくスロカイはペンの類を持たずにそのまま指を虚空に走らせ、整った筆跡とその後ろに小さく添えられた黒ウサギのイラストを書くと、画面の端ある〈完了〉のボタンを押す。

「これでよいか？」

「……うん問題ない。じゃあ誠心誠意探させてもらいます。依頼料は後

日相談という事で」

「…いいのか？こうゆうのは依頼を受けた瞬間に報酬を受け取る物ではないか？」

「俺の信条として「達成できなかった依頼の報酬は受け取らない」プロ意識に基づく信条。彼は信頼第一なのである。って決めてるので、俺の依頼は大体後払いになる。だからこれで大丈夫です」

「そうか。ではこれから宜しく頼むぞ？」

「ええ勿論。取り敢えず連絡を取り合うために連絡先ください」

「おおそうだったな。ひとまず何か連絡がある際はここに頼む」

その後二人は互いに連絡用の連絡先を交換すると、スロカイはなんだかんだで溜まっていた旅の疲れを癒すため、絢斗は睡眠中のベガスを叩き起こし夜警を交代し寝るために互いの寢床へと戻っていった。

☆【一時の別れ】

「さて、アンタとはここでお別れだな」

「そうね。ここまでありがとう」

ベカス一行はあの夜の極秘依頼（絢斗が「ベカスには頼まないのか？」と聞いてみたところ、スロカイは「なんとなくだけでもあの凡人には知られたくない」という返答を頂いたらしい）の後、三人は数回の野宿や休息を挟みながらも無事北アフリカ最大の都市、〈カイロ〉に到着した。

…それと同時に、ベガスと彼の妹「アイリ」の関係はここで終わることになる。

「ここで最後のアドバイスだ…その服は目立ち過ぎる。最初みたいな厄介事を避けたいんだったら現地の服を買った方がいい」

「プリン100個」

「……えっ本気で言ってるのか？」

口元をピクピクと痙攣させるベカス相手にアイリはコテンお首を傾げ、小悪魔の様に微笑む。

「とぼけるつもり？最低」

「…オイ絢斗お前も黙ってないでなんか言えよ」

「俺からは特に、取り敢えずベカスにはその要求に応える用意があるでしょう？とだけ」

「……くッ！」

まるで裁判で相手に親権を奪われ、今から己の愛する子供と引き裂かれそうになっている親の様な顔でベカスはアジトから入手した金の小袋をプルプルと震えながらもアイリにしっかりと手渡した。

（…ピツタリ100個分渡せば幾らか残るだろうになんで全部渡してんだこの人）

隣で地図と携帯端末を見比べながら凄まじい勢いで何事かを検索する絢斗は、内心そう思いながらも「偶には痛い目に逢え…いや何時も逢ってるか」と思い口に出すことはなかった。

「わあ。これだけあったらプリン100個以上は食べられるね」

「ああそうかいよかった。これで文句ないよな？」

「フフツ…ええそうね」

そう言うと、ベカスはウアサゴを跪かせすごとと操縦席に戻っていった。

「——ん〜…」

その一部始終を見ていた絢斗は、事務仕事で軽く強張った肩をほぐす様に大きく伸びをし、無言でチャットアプリを開くとへ黒ウサギの代弁者〱という名前のユーザーに向けてタカタカツターン！と一文送信した。

『あれぐらいだったら俺が渡しましたよ？』

『よい。あの凡人から筆取り取ったと言うことが大切なのだ』

　　というか目の前のアイリスロカイに向けてである。

『ではこつちで暫く写真の人物を探してみますね。何かわかったら連絡します』

『頼む。こちらでも進展があつたら知らせよう』

『了解。あと……』

『?』

『これ〱相手の容姿が幼くても真面目に仕事をする探偵と情報屋のリストです』

『む…感謝する』

『あとこれ〱お手軽な値段で現地の服が買える店のリストとその電子名刺〱です』

『…まさかさつきから端末を操作していたのは』

『そうです。この為です』

『……お前も中々難儀な性格だな』

『……世話焼きなのは自覚してます』

スロカイはチラリと絢斗の方を見遣ると、丸で不憫な者を見るかのような目でため息を吐くジェスチャーを送ってきた。

『ほ、報酬ふっかけるので覚悟しといてください』

『わかったわかった。終わった暁には叶えられる範囲で叶えてやる

う』

『…どうも』

なんか偏見を持たれた気がする…！とコクピット内で忸怩たる思いを募らせる絢斗。その際にベカスに無線越しに『まだ行かないのか？』という質問をされたので『撃墜スコアを配分している最中です』と返すと『…そうか！』という跳ねる様な語尾でベカスは納得した。因みに絢斗は確かに撃墜スコアの配分を行ってはいしたが、その作業はカイロへ向かう道中に済まされていた。

(素直にこのスコア送ったら調子乗って羊料理食べにいきそうだな…)

そんなことを思いつつも、作業が終わった後と送付することなくキープしておいたデータをウアサゴへ向け送信した。

「~~~~~ツ!!」

声にならない歓声を上げるベカス。きつと、いや多分彼の頭の中には目の前に広がる極東料理や羊料理と、それを食べる自分の姿が写っているのだろう…：と同時に絢斗は再び素寒貧となり意気消沈するベカスの様子を夢想した。

『では、そろそろ行きます。…必ず見つけてみせます』

絢斗はその一文を打ち切るとチャットアプリを閉じ、ベカスに向かって「そろそろ行きましょう」と声を掛け、自身の機体を立ち上げさせた。

「おうー早く行くぞ絢斗!!極東のアヒル焼きが俺たちを待っているウ!!」

「あーもう散財しすぎないで下さいよ!?!あとテンションおかしくなってますから、キャラ崩壊してますから!!」

「…待って」

今にもブースター吹かしてぶっ飛びそうな程ハイテンションなベカスを抑えようとする絢斗だったが、それは一人の少女の声掛けによって遮られた。

「なんだ『嬢ちゃん』?」

「…ありがとう」

少女の今までの傲慢な態度からうって変わって深窓の令嬢のような華麗さで、ペコリとお辞儀をしてみせた。

「…おう！またな嬢ちゃん!!」

そんな可憐な様子の少女にベカスは一瞬クラリとした己の意識を立ち直らせ、横に入る絢斗に「行くぞー！」と声を掛けるとそのまま早足気味にその場を去る——因みに絢斗も同様に数瞬身惚れてからベカスの声で正気に戻り、慌ててベカスの後を追った。

(…後で顔を隠せるフードとかマントの店も紹介しとこう)

内心、そんな決意をしながら……

☆【太陽神の再臨（無関係）】

「……………ええ?」

とあるホテルの一室で、絢斗は思わず困惑の声を溢した。

「ワカ軍が敗走しただけでも驚きなのにその主要素がかの十二巨神《アヌビス》の主砲【ジャステイス】って……」

絢斗の手は先程はまだそんなニュースを垂れ流していたラジオと、それにつけられたイヤホンに伸ばされ、それぞれ電源を切り、耳から引っこ抜く。

あの後集合場所に到着した絢斗とベガス。そして彼らの同僚と上司にあたるカルシエンとフリーズと合流し、共にワカ軍の作戦会議に参加した。そこで見た目の割に幼い言動が目立つ極東人がワカ軍人達を煽ったりといったトラブルも見受けられたが、概ね無事に進行しその日は解散となった。そして作戦開始前夜である今日に飛び込んできたのが——先程の衝撃ニュースである。

「……………ひとまず落ち着こう」

そう言い部屋に備え付けられた電子ケトルを持つと、紙コップ付きのインスタントコーヒーへ注ぐ。安物特有の薄い匂いを漂わせながらコップの中の水が黒く染まるさまを見届けた絢斗は息で冷ますことなくそのままグイッと——

「アツツツ!!」

——結果猫舌の絢斗は思いっきり舌を火傷した。これでは「冷静になろう」ではなく「れれれ冷静になれ」某遊○王のネタ台詞である。

「…あーもう。寝る」

恥ずかしいやら考えるの面倒臭いやらで何もかもどうでも良くなった絢斗は、そのままベッドにダイブし不貞寝した。

「ワカ軍が敗走した?」

翌日。場末の酒場にて合流したフリーズを除く三人組は、顔を突き合わせながら昨日の情報の整理をしていた。

「…ハイ。今日の朝刊やネットニュース、情報屋から買った物からして間違い無いかなど」

「こりゃ、すごいニュースだね」

今朝になるまで知らなかったベカスはその事件に瞠目し、前日情報を受け取った絢斗とカルシエンは各々の表情…だが少なくともプラスでは無い感情を顔に浮かべていた。

「にしても、十二巨神へアヌビスか…：俺の聞いた限りじゃもう動かないって話だった筈だろ?」

「その噂が流れてた当時はって事だろうな。腕のいい整備士でもいたんじゃないか?」

「…腕のいい整備士」で済ませていい範囲ですかそれ…：?」

「まあ兎に角。今作戦でのワカ軍がほぼ壊滅したってのは事実だよな」

「…だな」

「ですねぇ…」

『はあ…』とため息を吐く三人…ここまで書いてて思ったこと『うそ、私の作品の登場人物ため息付きすぎ…?』。そりゃそうだ。彼らは幾

ら善良でお人好しであつても結局は戦場が生き場の傭兵達。格好の稼ぎ場であつた今回の戦争の形成が一気に（不利側へ）逆転したことは間違い無くマイナスである。

「…そういえば地下カジノで賭けやつてた爺さん見ました？」

「ん？なんだそれ」

「俺も見たぞソレ…怪しいノミ屋の老人が連盟の勝ちに5億も賭けた上で、賭け金最低1万にて「ワカと連盟のどちらが勝つか」で客を集めてたアイツだろ？」

そう言うのとベカスは脱力した様に上半身をテーブル上に投げ出しながらも、口元をニヤリと歪めると、顎だけでカルシエンと絢斗に方向を示す。

その先では、「何かの賭けに敗れたような」様子の傭兵達が一喜一憂…というかほぼ憂いげな顔をして何かの券を握り潰していた。

「オレも賭けたかつたんだが、あの時は金がなくなつてさ。今思えば、賭けなくてよかつたよ」

ベカスのその言葉に軽く視線を泳がせる絢斗…しかしその隣では少々顔を青ざめさせたカルシエンが「まさか…」と呟く。

「ああ…俺は悪い予感がする……」

その時、バアン！という力強い開閉音と共に、赤髪の女性がツカツカと酒場に入ってくる。

「あ、フリーズさん。お久しぶりです」

「……………」

絢斗が声を掛けるも聞こえてないのか、はたまたそもそも届いてないのか。赤髪の女性——ベカスとカルシエンが所属する【アンデット小隊】の隊長フリーズは、ベガス達の座るテーブルで停止すると、拳を天へ高々と振り上げ——

「チツクシヨクワカ軍め!!!」

ズガン！というこれまた凄まじい勢いでテーブルをぶん殴る。頑丈な木製のテーブルが少し浮き上がり、ミシミシと悲鳴を上げた。

因みにこの一番に被害を被りそうな男三人は慣れているのかすくさま自分の飲み物を保持し、衝撃から保護済みである。

「賭けてたのか？フリーズ」

ベカスが無事だった自信の酒を飲み喉を潤すと、荒ぶるブリーズへ向け臆さず質問する。

「あんな勝って当然の勝負で負けたワカ軍は豚以下だっ！」

そう言うのと殴り足りなかったのか再び拳を天に突き上げようとするブリーズ。

(…ほつといてもいいんだけど)

チラリと絢斗は店のカウンター席にいる店の主人の男を見遣る。

男の目は今にも振り下ろされようとされているブリーズの拳に集中しており、その顔は「テーブルが壊されてしまうことへの恐怖」が垣間見えた。

ふと自分の手に握られたビール入りのジョッキを見る。この酒は、値段の割に味も量も申し分ないほどに旨かった事を思い出し、そんな素敵な店に迷惑をかけるのは本意ではないことを絢斗は確認する。

振り下ろされる拳に向かって絢斗は腕を振るい、打ち下ろしの進路上に腕を差し出す。勿論ブリーズの拳はそのまま絢斗の腕へ向かって行く。

「——なんのつもりだ？」

しかしその前にブリーズが絢斗の腕にあわや直撃かとなりそうになった直前に、ブリーズの腕がピタリと絢斗の腕に当たる直前で止まる。

「いえ別に。それより悪いことあったんなら酒飲みません？」

軽く怒気を放ちながらそう聞いてくるブリーズを前にした絢斗だが、特に動じる事もなくしれつとした様子でブリーズに向かって自身の酒を差し出す。

「」

「……………(ゴクリ)」

言葉を発する事なく、真正面から睨み合う二人。何処からか「ゴゴゴゴゴ…」という音が聞こえてきそうな緊迫感漂う雰囲気は歴戦の傭

兵である筈のベガスとカルシエンは思わず息を飲み込んだ。

「…………ハッ」

やがてフリーズが手を下ろし、絢斗の手からジョッキを掻っ払うと一息に飲み干した。

「昔よりかは凶太くなつたみたいだな」

「そりやまあ。そちらから離れた後も修羅場はありましたし」

「…」先ず私は、ワカ軍との契約を破棄する。またな」

そのままフリーズは酒場を出て行く。出口から外に出る直前に「ああ因みにオレはあのノミ屋に十万渡して見事にスツた」と言い残り、完全に立ち去っていった。

「…なあカルシエン。フリーズに幾ら渡したんだ？」

「六万……」

「そ、それはご愁傷様でしたね…」

「んなこと言ってくれるのはお前ぐらいだよ…」

そう力無く頭を下げるカルシエン。なんとか元氣付けようと「そんな事はない」と励まそうと隣のベガスを見てみるが、先程までのグツタリとした様子は何処へやら。無駄に姿勢良く椅子に踏ん反りかえり、足を組んでまでしてカルシエンを見下ろしていた。

(…………人間って、汚いな)

流星にこれでは「ほらここにも貴方を思ってくれる人がいるんですよ」とは口が割けても言えないので、絢斗は中途半端なフオローになってしまった事を内心謝りながらも、それを誤魔化す為に酒を飲もうと…………した瞬間について先程フリーズによって空にされた事を思い出した。

「店主…！お代わりくれ!!」

「はいただきますー!」

空のジョッキを掲げお代わりを要求し店主からの返事が返された事を確認すると、人差し指でテーブルをコンコンと叩き始める。

「実際。今回の件でワカ軍はほぼ壊滅…アチラさんも傭兵雇ってる暇があるなら撤退するだろうし、事実上今回の仕事はパアですかね」

「だな。ひとまずフリーズが降りるならオレも降りるぜ。お前らはど

うする?」

絢斗と同じように自分のジョッキを空にしたカルシエンは、自信の酒代を取り出しテーブルに置き席を立つ。

「僕は暫くここに居ます。別口で依頼が入ってるので」

「おう。流石AAAランクは違うなあ」

「：戦闘能力をかわれての依頼ではないんですけどね」

「俺も残るぜ。金を稼がなきゃここからの脱出も出来ないからな」

「：何言ってるんだ? 国外に出れる程度の金はあるだろ?」

「いやー：アハハ」

カルシエンの疑問の声を誤魔化すように、ベカスは苦笑いを浮かべながら後ろ手で頭を掻いた。

「：まさかお前。レストラン・ファラオ高級レストラン：らしい。名物は羊料理だとか何とか。成人男性一食分で片道分の旅費が消えるのなら確かに高いのかもしれないに行ったのか?」

「あそこの羊料理は絶品だったな」

「：いやだとしても撃墜スコア分の追加報酬が」

「それも俺の腹の中だ」

「：……………」

もう片方の手で腹を叩いてみせるベカスを、呆れたように見るカルシエンと絢斗。彼らの口からは、自然と同じ言葉が出た
「お前って奴は救いようがないな」

☆【守秘】

「残念だが、その写真の女は見つかんかったな」

「そうか：情報ありがとう。これは金だ」

「半分でいい。達成できなかったからな——ああそう言えば数日前に、その写真と全く同じものを持ってきた奴がいたぞ」

「本当か!? 一体どんな奴だ」

「んー：先ずは、子供だったな?」

「こ、子ども…？」

「んで目立つピンク髪の女の子で…赤と青のオツドアイだった。綺麗な子だったからよく覚えてる」

「……………うん？」

「んでもってこちら辺でも有名な伝統服着てたな。確か○○○○って店で…あそこ知ってんなら現地の奴かと思ったがあんな子見た事ないんだよなあ」

「……………」

「写真は撮ってないんだが、鮮明な容姿だったから人相書きなら出来るが…いるか？」

「い、いや大丈夫…また来マス」

「？ 大丈夫かお前？ お得意さんなんだから体調崩してくれるなよ」
「り、了解です」

期待していた情報を得られなかった失意と、依頼主が同じ場所に来て自分と同じ事を自分よりも早くしていたという事実にはほんの少しだけ自尊心を傷付けられながらも、彼は馴染みの情報屋を後にした。
（そりや、リストの一番上に書いたんだから真っ先に行くに決まってるよな…………）

「ここまで管理能力落ちてたのか俺…」と自分自身に落胆しながらも、絢斗は携帯端末を取り出しスロカイに渡した情報屋及び探偵のリストを見た。

（ここ以外となると…やっぱり非合法な所から当たってみるしかないな。まあ路地裏とか場末の酒場にいる様な奴らが情報持ってるのは限らないが…………）

目を閉じて軽く考えるながら大通りを歩く絢斗。因みに絢斗の燃えるような赤い髪と、^{ダブルエース}へA Aの芦名絢斗という彼自身の知名度も合わさって周囲では軽いざわつきと喧騒が出来上がっているが、彼自身は集中していたので全くもって気付いていなかった。

故に――

ドンッ

「おっ？」

「むっ。」

自身の正面から歩いてきた大柄な男の接近にも気付かず、軽く肩と肩が打つかってしまうのも仕方ない事だった。

「すみません。考え事をしてたので……」

「いや、こちらこそ済まなかった。注意不足なのはお互い様だ」

「そう言ってもらえると助かり……っ」

絢斗は写真から目を離し、打つかってしまった男見上げ……思わず息を呑んだ。

先ずはその体格。絢斗自身170cm後半と決して体を資本とする傭兵稼業に勤めるものとして高いとは言えない身長だが、その絢斗と比べても明らかに大きい。目測でも180cm以上は確実。下手すると2mに届きかねない長身。肩幅や横幅といったものは甲冑とマントが一体化した特殊なものを着用しているため不明瞭だが、それでもその長身に見合う体格をしているのは間違いなかった。

次にその顔……というか仮面仮面なのかヘルメットなのかサイボーグ内海なのか分からは、白を基調とする顔全体を覆うフルフェイス型で、頭頂部からはヘラクレレスオオカブトの様なツノが生えている———というか文字通りの鉄面皮なので圧力がスゴい。

最後に……彼自身から放たれるオーラだ。前述の様子で何も無かつたらそれはそれで怖いのだが、そんな想像を簡単に打ち壊してしまうほどの殺気……というか闘気を放っていた。しかしそれは絢斗に向けられたものではなくあくまで彼から自然と発せられている……諭えるなら、鞘に納められた業物の刀のようなものを感じさせる。

「……っ？」

(いや落ち着け……相手は別に喧嘩腰って訳じゃないんだ)

思わず懐の得物に手を伸ばしそうになる絢斗だが、手が得物本能に届く直前に脳理性が間一髪で止める事に成功し、そのままゆつくりと、不審にならない程度の速さで手を元の場所に戻した。

「……コレからは注意させてもらいますね。では失礼」

「ああそれでは———待て」

「っ……何でしょうか？」

彼とすれ違い、そのまま通り過ぎようとした瞬間…鋭い声が絢斗の
耳朵を貫いた。正直その言葉だけで絢斗の心臓がワントンポ早くな
るが、それでも表面上はポーカーフェイスを取り繕って応対する。

「その写真。見せてもらえないか？」

「……………どうぞ」

正直見せたくはないがここで断れば更に相手に不信感を与えてし
まうと考え、絢斗は素直に男に向かって写真を渡した（因みにスロカ
イからの依頼に“守秘義務”があつた場合死ぬ気で逃走を凶つてい
た）。

「……………何故。この女性の写真を持っている？」

「別に？道端で拾つてただ美人だなーってだけですよ」

「少し端に避けようか」

「いやあ急いでいるので…「ん？」…同行させてもらいます」

誤魔化しが効くとは思えなかったが念の為すつとぼけてみたが、男
がこれ見よがしに捲ったマントの内部から垣間見えた高出力ビーム
ソードの威圧と少しドスの効いた声によって阻まれ、そのまま二人は
路地裏へと入って行った。

—— now loading……——

「で、何故あの人を探している？」

「…所でアナタ。冗談は通じる？」

「フム…すまんが俺は冗談やジョークの類は嫌いだな。思わず手が
滑ってしまうかもしれない」

「——依頼を受けた。その人を探せとね」

「依頼人の容姿や名前は？」

「悪いが、無理。教えられない」

そう言った瞬間。絢斗の喉元にビームソードが突き付けられる—
同時に、彼が纏う闘気も変化した。自然体なそれから…標的を定め
抜刀された魔刀のソレへ。動かない筈の仮面の、覗き穴に辺る黄金色
の双眼から向けられる視線も心なしか鋭い物に変わったような錯覚
を覚える。

「つ…貴方ミラージクロスの、選手ですよね？前テレビで見たこと

があります」

「そうゆうお前は、芦名絢斗だな？俺もお前を雑誌や酒場で見た事がある」

「ひとまず、その剣を下ろしてくれ。人間には何の為に口が付いてるのか知ってる？」

「余裕だな。まさか偽物とでも思ってるのか？」

「——まさか」

「いいだろう。その度胸に免じて今回は引いてやる」

男は絢斗の喉元からビームソードを離すと、ゆっくりと絢斗から離れて行く。

「一つ警告しておく。その人をもし今後も探し続けるといふなら…覚悟する事だ」

「っ！アンタこそ、そんなに舐めないで下さい」
「ほう？」

せつかく見逃してもらえそうな雰囲気だったが、絢斗自身の傭兵としてのプライドがそれを許さなかった。何より脳裏によぎったのはスロカイ 依頼主の、ほんの微かだった「この人が見つかってくれたらいいな」という願いを感じさせる。哀愁に満ちた顔。

（ここで引き下がるのは簡単だ——だがそれは、助けてもらった俺がしちやいけない事なんだ…！）

今尚も目の前の彼——世界最高峰のBMパイロット集団「ヘミラー ジュクロス」の正式メンバー「バイロン」の殺気は、抑えられる事なく絢斗を叩き付ける。一定水準以上の腕前も持つと自負する絢斗だが、そんな彼でも思わず情けない声が出てしまいそうになる。しかし男としたな最低限の威厳は保たんと、丹田に力を込め声を抑え込む。「俺は依頼を絶対に達成します。今回も然りです…：例外はありません」

絢斗は脂汗を掻きながらもバイロンを見据え、その仮面の奥の彼の瞳に届くと、思い切り睨み付ける。

「……………」

「……………」

そのまま暫く見つめあう二人だが、不意にバイロンが「フフツ」とくぐもった笑い声を上げ、仮面の口の部分に空いていた方の手を当て口を押さえた。

「笑うところありましたっ？」

「い、いやすまない……ふふつ……俺に向かってそんな啖呵を切つてくる奴は久々だな。つい笑ってクククツ」

「ええ……？」

「ではな。今度こそ引くとしよう」

一頻り笑い終えたバイロンそう言うと、人間とは思えない程の跳躍を持って屋根上へ飛び立ち。そのまま何処かへ消えて行った。バイロンの気配が消えたと確認すると――

「し、死ぬかと思つたあ……」

思わず地面にへたり込んだ。情けないとは自分自身でも思うが、そんなことを気にするような余裕すらない彼は、プルプルと震える己の腕を見詰めた。

（ああ……つたく。何が^{ダブルエース}へA Aだ。何がへ一人千色だ――情けない）

大きく深呼吸を吐いた絢斗。多少震えが収まった腕を隠すようにもう片方の腕で庇うと、少々煤けた背を晒しながらも歩く。

プルプルプル！

「つとはい芦名絢斗です。――カルシエンさん？どうしたんですか………：貴方の言う「グッドニュース」っていい思い出が無いんですか
ど」

遙か格上の存在を知り傷心中の絢斗だったが、そんな彼に戦場は癒しの場を授ける事なく次なる戦いへといざなう。次なる任務は「花嫁の暗殺」同僚のベカスと、謎の極東人と共に、絢斗は十二巨神の一角と対峙する。

☆【次なる戦い】

「…で、その撤退戦の支援に俺も参加しろと?」

カイロ郊外の廃墟で絢斗はそう独言を言う…状況の説明すると、連盟軍の切り札へアヌビスの主砲【ジャステイス】の粛清という名の蹂躪に晒されたワカ軍。一撃で軍の過半数以上を消し飛ばされ、逆転したことによって彼我の戦力差にて当然の様に敗北した。

彼ら———というか生き残った戦艦とその部隊は当然自軍の首都へカイロへと向かうのだが、当然それを連盟軍が見逃すはずなく。現在彼らは連盟軍の追撃を受けている。

その連絡を受け取ったワカ軍部だが、彼らはコレを【罨】だと考えた。今一番彼らが恐れている事は総力が結集したカイロの戦力を上記の友軍への支援などによって分散され、その隙に首都を陥落させられる事である。

これは困ったとワカ軍部の将校達は頭を覆った。このまま馬鹿正直に救援に行くのは下策…しかし友軍を助けられないというのは以ての外だ。下手すると兵士や国民の士気が下がりがねない。

ではどうするか。自軍から戦力は出せないが友軍は助けなければいけない。そこで将校達は思い付いた———ワカ軍から出せないなら、他所から持って来ればいいと。

そこで発注されたのが前回のカルシエンの言っていた「グッドニュース」の内容だ。

内容は孤立し現在敵の攻撃を受けている戦艦の支援及び、その指揮官の保護。成功報酬は破格の50万ゴールドである。

しかしその報酬金の高さは依頼の難易度を表すように、依頼内容を要約すると「死地に飛び込んで木偶の坊の味方を死守しろ」という内容である…これはヒドイ。こんなのを受けるのは余程金に困窮している三流傭兵か自分の強さに絶対の信を置く愚か者ぐらいだろう。

…後者はともかく、前者は絢斗に覚えのある人物が確実にカテゴライズされているだろう。

「まあ依頼主からも「依頼中に別の依頼受けちゃダメ」とは言われてないが」

絢斗は先程までカルシエンと通話をしていた携帯端末を操作。チャットアプリを起動しその中から「黒ウサギの代弁者」さんとの個人チャットを開く。チャットの内容は基本的に絢斗が集めた情報を提供し、それに対して『うむ』『そうか』とスロカイが簡潔に答えるというほぼ一方通行的なものとなっていたが、その中でも会話の様相を成していた数少ないものの一つの内容は、こんな感じだった。

絢：『質問いいか？』

ス：『よい。なんだ？』

絢：『…依頼を受けている最中に別の依頼を受けてもいいか？』

ス：『余が依頼したアレに支障が無ければ構わぬ』

絢：『了解。あと今回は裏路地の奴らから色々絞ったけど、生憎成果はなかった…すみません』

ス：『成る程…残念だがこちらも目ぼしい情報はなかった。お互い無駄足だったというわけか』

絢：『…すみません』

ス：『よい。互いに根気強く続けるとしよう』

絢：『了解です。頑張りましょう！』

ここでチャット終了。

「…まあ、情報集めで鈍った体を解すには丁度いいか」

そう言う絢斗は汗を一切かいていない体を翻らせ、これまで彼が搭乗してきたBM——拡散ビーム砲とウィーゼル弾を主力とした一対多の戦闘を得意とした遠隔主体の「ラヴァハンマー」。高い威力を誇る爆射武器【帝国の光】以外にも、各位置に設置された多数のビーム兵器を操りさらにその高い機体性能から近接戦もこなせる【ガラハッド】とはまた違う——青と白で構成されたBMに乗り、エアコンをつける事なく発進させた。

暫く歩かせスピードがのった瞬間。彼は機体を浮かし、一気に天へ飛び出す。

「よし…行くよー」

蒼い流星が冷気を振り撒きながら、灼熱の空を横断した。

☆【流星推参】

「クソオ！漸く援軍が来たかと思えば、BMがたったの二機とか軍部は我らを見捨てたのか!？」

時間と場所が変わって敵に追撃を受けているナイル第7師団旗艦内部。指揮を執る長官ノリスは、そう悪態を吐いた。

彼の直ぐ近くに設置されていたレーダーには、自分が搭乗する陸上戦艦とつい先程救援に駆け付けた傭兵達が駆るBMを表す三つの青い光点。そしてそこからこちらを包囲する様に展開された範囲一杯の赤い光点。つまるところ敵さん方である。

救援の傭兵達はそこそ腕がたつらしく、登場から暫くたった今尚もペースを落とす事なく赤点と接触しては消し去っているが：それでも彼らが敵を撃破するペースよりも新たな敵が出現するペースの方が速い。このまま彼らが物量に押し潰されてしまうのも時間の問題の様に感じられた。

「~~~~ッ!!~~~~で死ぬのは御免だぞ!?!他の救援は『じゃあ一名追加で』：なっ!?!」

痲癩を起こしていたノリスは、再び救援の有無を確かめようとした瞬間：スピーカー越しに若い男の声が司令室に響き渡った。直後司令室のメインモニターが突如として砂嵐を吐き始め、鮮明になったと思ったらそこには赤髪紫眼の男の姿があった、

『ん…ヨシつと。聞こえますか?見えていますか?』

「だ、誰だ貴様はっ!」

突然スピーカーとモニターがジャックされ、更にはその下手人と思われる男に向かって、ノリスは指を刺しながら糾弾する。内心「敵からの降伏要請か!」と思うが、それにしても気楽な様子の方は綽綽と話し始めた

『アレ?知ってる人いないのか…:取り敢えずこうゆうものです』

そう言い、モニターの眼前に首から掛けられたカードを翳す。底には映像の乱れで少々読みにくいのが、「OATHカンパニー所属・ランク〈AA〉 芦名絢斗」と書かれていた。

「なっ……！」

『見ての通り、これでも傭兵です。介入しますけど……いいですよね？』

「あ、ああ構わない。報酬は……」

『後で貰います。今は前方の味方二人を援護してきます』

言うないやなモニターが「プツンッ」と言う音と共に消え。戦艦の後方から急速に接近する青い光点が表示され、驚くべきスピードでレーダーの中心——つまりは陸上戦艦の上で停止した。

「っ……！」

思わずノリスは陸上戦艦の強化ガラス製の天窓から、こちらを燦然と照らす太陽を見上げる。すると、太陽を遮る様に一体のBMが姿を見せる。青と白が特徴的なそのBMをもっとよく観察しようと目を凝らす——

『……………』

——直後、窓に霜が降りた事によって視認が不可能となった。

「……………霜だど？この砂漠で!?!」

そうノリスが言葉を溢した瞬間。

ズキユウウン!

敵の戦車群に向かって、巨大な電撃——長距離陽電子砲簡単に言うとエヴァのポジットロンスナイパーライフル。流石にあそこ馬鹿げた威力はないが炸裂した。当然その威力によって砂埃が発生し、周囲一帯の視認が不可能となる。

間髪入れず二発、三発と続けて陽電子砲が放たれ、再び砂漠の砂が舞い上がる。

「て、敵勢力!今の砲撃で約二割が反応消滅!」

「すごい……たった一瞬で……!」

「武器が強力だったものありますけど、的確に相手の集団を撃ち抜いています!」

クルーや観測員達が感嘆の声を上げながら、彼の戦果を報告する。
「……………ええ?」

未だに衝撃抜け切れぬノリスだが、そんな彼を置いていくように事態はさらに動いていく。

陸上戦艦の上部から飛び出す様に飛び出た白と青が混じった蒼いアフターバーナーを引きながら、これまた蒼いBMが砂埃へと飛び込んでいった。

—— now loading! ——

「ウオラツシヤアアア!!」

色々と台無しな雄叫びを上げながら、絢斗は青いBM：汎用性の高いA級BM「フレンチナイト」シリーズの遠距離戦用試作機。凍結特化の「プルシアンブルースター」を操り、一人戦場に飛び込み武力介入を行っていた。正確には彼一人ではなく味方もいるが、突入時は彼一人なので問題ないへコマケエコタアイインダヨ!

敵の戦車へと近づくと、その戦車は一人でに凍り付き始める。その隙を逃さず絢斗はプルシアンブルースターを前方へ急発進。唯一の近距離武器「スパイラルスピア」を以てして騎馬兵の如く突撃、貫通させた。

しかし敵を倒し残心する間も無く他の敵からの砲撃が降り注ぐ。急いで着弾予測位置から離れ自分よりも先に戦っていたBM：ベカスとウオサゴのコンビと合流する。

「…ノリで突入してみたけどこの機体遠距離支援機体だから来ない方が良かったかもしれません!!」

「じゃあなんで来たんだお前!!?」

冷静に己の技量と搭乗BMの相性と彼我の戦略差を見極め、結果「突入なんてアホな事せずには戦開始地点から動かずに狙撃してる方が良い」という結論を出した絢斗と、それに思わずツツコミを入れるベカス。相変わらず呑気な会話を交わす二人だが、手元と目線だけは忙しなく動いており次々とキルスコアを重ねていった。

「チッ! ブレイクパルス!!」

「螺旋射撃!!」

ウアサゴが胸の装甲を展開させその奥から現れた大型のビーム砲がニョキツと顔を出し、そこから発射されたビームが敵をなぎ払う。プルシアンブルースターは敵を槍で突き刺すと、内蔵型の実弾銃が炸裂。ゼロ距離からの攻撃を以て敵を粉々にした。

(長距離陽電子砲はさっきの狙撃で再装填中。リロード。こーゆう時は戦車系の【全力装填】が羨ましいな！)

戦闘をこなしつつもチラリと横目で各種バロメーターを確認し各武装の状況を確認しながらも、槍で突いては離脱し銃撃しては相手の攻撃を避けウアサゴを囚にしているのは斬りかかられたりしたりしつつも、着々と敵の残骸を増やしていく。

「へえ。やるじゃないかー！どうやらお前は、そんじよそこらの雑魚とは違うみたいだな」

敵の頭上を飛び越えその瞬間に下の敵を斬り付け撃破。周りの敵を上空からの「360度ミサイル斉射」で牽制をするという曲芸じみた行動をとっていると、敵を一切寄せ付けない圧倒的な格闘能力で敵を撲殺するAランクBM「アキレス」から公開通信にて若い男の声が届く。——そのとても傲慢そうな声音から、絢斗の脳裏には前日のワカ軍（敗北前）との作戦会議にて無意味に軍人を煽り無用な争いを引き起こしていた極東人を思い出した。

(確か、名前はえーりん(。▽。)。〇多。えーりん！えーりん！……もとい「英麒」だったな)

あの時はその傲慢な態度とソレが全面に発揮された行動（実際彼の態度に苛立った傭兵たちと英麒の乱闘騒ぎが起こっていた）に、正直悪感情を抱いていたが、今は頼もしき味方の一人。ここは手を取るべきだと絢斗は判断した。

それに、今彼が搭乗しているアキレスは絢斗にとっても思い入れのある機体である。絢斗がBランクに昇進した際のボーナスで初めて購入したAランクBMであり、その豊富な遠距離武装と堅い装甲に何度と助けられてきた思い出深いBMであった。

「…【アキレス】はいい機体だよな！」

「…………？」

「豊富な飛び道具に優れた運動性。更には高コストパフォーマンスでいうのもいい」「何言ってるんだオマエ」……え？」

「この雑魚BMに乗ってるのはただ単に俺が手に入れられる範囲でコイツが『一番マシ』だったからだ。もつといいのがあったら絶対にこんなに乗らねえ……よ!!」

そう言うや否や背後から忍び寄っていたC級BMを、神速の裏拳で迎撃する。しかしその腕は主人の無茶な操作に無理やり応えたためフレームから火花が散っており、確かに英麒の言う通り彼からしたらアキレスは不足にすぎるのだろう。

(……やっぱコイツ嫌いだわ)

人への認識は滅多に変わらないという事を学んだ絢斗は、再装填の終わった長距離陽電子砲を構え、アキレス——の背後にいたBM小隊へ向けて発射する。

「雑魚なら当たってたかもな！」

英麒は自身へ向けて放たれたそれに驚く事なく、ひらりと舞うように陽電子砲を避け見事絢斗本来の標的へと着弾させた。

「ツチ」

狙い通りと言えば狙い通りだが、半分程度しか達成できなかったことに密かに舌打ちを打つ。しかし今の援護射撃のお陰で多少溜飲が下がったので、今は一旦英麒への悪感情を忘れ脳内で作戦を立て始めた。

(敵は戦車と下級BMが数十体……でも練度はそこまで大したことない。少なくとも俺たちなら一対一で確実に確殺出来る程度……だが)

ふとコクピット内で『熱源反応接近中』という音声と共にアラート音が鳴り響く。すぐ様回避行動を取ると、ブルースターのすく側から、ブルースターの持つ長距離陽電子砲を上まわる威力のビーム……軍事企業【地中海複合企業】で最も有名かつ最も威力が高いと噂の爆射武装【ギガ破壊砲】が通り過ぎた。因みに発射したのはAランク戦車【センチピートル】である。

「……乱戦中にギガ破壊砲ぶつ放すとか正気か!？」

絢斗が避けたギガ破壊砲のビームが、僚機である筈のハンマーシ

リーズやラピスラズリシリーズを武器名通り「破壊」していく様を見て、思わず絢斗は思わず瞠目した。

(…これだ。乱戦中不意に飛んでくる【ギガ破壊砲】!!いったいいつから反ワカ軍達は【ジャステイス】といい【ギガ破壊砲】といい前時代じみた大艦巨砲主義者共の巢窟になったんだ!)

乱戦という特殊状況と、それに拍車を掛けるように次々と発射される破壊光線に苛立ちを覚えながらも、それらを無理やり押さえつけ考えを纏め始める。

(ギガ破壊砲の長所は間違いなく絶大なその威力だが、対する欠点はリロード時間の長さでギガ破壊砲搭載機には反動を抑制する機能が付いていないこと!)

…そう、現存する「戦車やBMに搭載可能な範囲での武装」ではトップクラスの威力を誇るなおブレードキングドーン決戦型FAやインフィニティ・コスモス。そしてディアスターカーRXRといった例^{SSSランク}外は除外するものとする【ギガ破壊砲】だが、それには威力に見合うほどの長大なチャージ時間。そして何よりなぜ着けていないのかと小一時間程度問い詰めたくなるが、ギガ破壊砲には発射時の反動^{ノックバック}を抑制する機構。もしくはそれに耐え得る工夫がされていないということである。

事実絢斗が先程避けたギガ破壊砲も、当初は標^{フルシアンブルースター}的へと狙いを定めて発射されていたのだが、その後の反動によって「水を過剰発射した結果激しく荒ぶるホース」の様に(ビームの)軌道と(機体の)機動が滅茶苦茶と化していた。

(となれば狙い目はその命中率の低さとそのリロード時間の長さ!幸い足の遅い奴はいないからいける!!)

「ベカスさんと英麒はそのまま前衛貼ってください!俺は後方から敵の動きを見えます!」

「そう言っつて。楽な場所につこうとか考えてないだろうな?」

「…じゃあテメエロクな狙撃武器がないBMで俺と交代するか?」

「喧嘩するな二人とも…とりあえず了解だ!アンタも行くぞ!」^{英麒}

「ツチ。指示させるのは嫌いなんだけどなア」

絢斗が指示を出すとこれまでの関係ゆえに即座に従うベカスと、不満ありげな様子を見せながらも少なからず認めているベカスに諭される形で英麒が二人一組ツーマンセルとなって敵の大部分を前線に固定。絢斗は近くにあった大岩の上に登ると、改めて長距離陽電子砲や、プルシアンブルースターに搭載された冷凍ミサイルや頭部陽電子砲を展開。更にレーダーを「短い範囲だが敵の情報を精細に察知できるモード」から「機体の前方の広範囲を探索し、詳細なまでとはいかないが熱源や蓄積チャージを明確に探知するモード」へと切り替えた。これによってベカス達が見えない敵を知らせたり【ギガ破壊砲】を始めとした強力な武器の発射準備を咄嗟に察知し、また彼らに知らせる役割を果たすためである。

「ヨシ！配置につきました…状況開始！」

「了解！」「オウよ！」

プルシアンブルースターから発射された数十発の冷凍ミサイルから発せられた「シュポポポ」という少々情けない音を皮切りに、野郎三人組の共同戦線が幕を開けた。

「…ッ！前方に高熱反応！【ギガ破壊砲】発射準備と予測。回避しろ！」

「サンキュー！」

ベカスが警告された範囲からヴァサゴを除けさせ、絢斗も射線に入っていたのでそれに続くようにプルシアンブルースターを離脱させる。瞬間今回十五発目となる【ギガ破壊砲】が放たれ、周囲の地形を粉々に吹き飛ばした。

「なんか今のヤツ今までのよりデカくなかったかッ？」

「データ照合——SSSSランク戦車【ビートルキング】!?ワンオフとは言わないけどいいモノ乗ってますね！」

「是非俺のと交換して欲しい…なっ！」

一際広い範囲で放たれたギガ破壊砲に冷や汗を流す絢斗とベカス。そして運良く範囲外にいたため気にせず暴れ続ける英麒の三人の視線の先には、これまでの戦車やBMとは一線を画す大きさの、金や黒

で配色された甲虫スカラベを思い出させる形の戦車が現れた。

「反ワカ連盟の黒い重戦車!？」

「——傭兵よ。なぜお前は自信に関係のない戦いに介入する?」

そんな時目の前の戦車から絢斗とベカスへ向けて音声通信が開き、そこから若い男の声が聞こえてきた。信心深くもありながら、内に確固たる「自分」を持っていると確信させる声は、二人に僅かな威圧感を感じさせた。

「…それが、俺の仕事なんぞな」

「金の奴隷」? 哀れなものだ。アマ神の使者としてお前を主の元へ送ろう。そこで犯した罪を悔い改めるがいい」

ベカスの身も蓋もない様な明け透けな回答に、失望したかの様にその青年……バーブは先の言葉を実行させるためビートルキングの砲身をゆつくりと絢斗達の方へと向け始めた。

「ちよつと待て!俺もベカスさんと同じような扱いにされちゃ沽券に
関わる!？」

「それはどうゆうことだテメエ!」

——の前に、バツとベカスの前に手を大きく振り前述の台詞を絢斗が言った。その余りにもあんまりな台詞にベカスは思わず抗議しようとうアサゴを操りプルシアンブルースターに掴みかかろうとするが、それを器用に避けて見せる絢斗。

「そういうえば聞いていなかったな。いいだろう——よそ者よ。なぜ自分とは関わりのない戦場に参加した?」

「……金の為とか名誉の為とか、後は世のため人のため!!」

「…つまりは、先程の男と似たような理由「それもあるけれど!」…ツ
?」

「何よりも、俺を助けてくれた恩人のため、俺を信じて依頼して、心痛める少女のため!俺は、ここに居る!!」

そう、堂々と啖呵を切ってみせた。

「そうか」

「…そうだ!」

「……子供っぽいって言われたことはないか?」

「沢山ある！だけど直す気はない！（開き直り）」

二、三回ほど言葉を交わした後。バーブは困惑したように数秒間黙ると、ふと気付いた事を口に出した。

「因みにだが、今の会話中に俺の【ギガ破壊砲】の再装填が完了した」
「えっ」

『騙して悪いが』…というヤツだ。さっきの問答も、俺からしたら時間稼ぎに過ぎなかった」

「…だが、存外いいモノを聞けたからな。君達にはせめてもの気持ちで申告させてもらった」

「……………」

「神に祈る覚悟はできたか？」

その言葉と共に、先程と同じ。センチピートルとは格が違う程の威力のギガ破壊砲が放たれる。

「出来てる訳ないですよっ!!」

「暫くあの世に行く気はない！」

発射されたギガ破壊砲を見て瞬時に覚悟を決めた二人は、いつぞやのように互いに反対側へと飛び出す。しかし今回撃破すべき目標は同じなため、二手に別れビートルキングへと迫る。

発射に対する抑制機構が付けられていないギガ破壊砲。そしてそれは最上戦車【ビートルキング】も例外ではない。搭乗員が暴れ狂う車体を巧みな技術で押さえ込むが、それでも右へ左へ右往左右するビームを、二人は生きた心地がしないまま付け焼け刃の空中機動にて回避していく。

「ウオツ!？」

しかしベカスが瞬時の判断を見誤り、一瞬だがギガ破壊砲がウアサゴのシールドに擦りその衝撃で上空へと吹っ飛んでいった。

「ベカス!？」

「気にするな！いいからお前は前向いて走れ！」

「…了解!!」

吹き飛んでいくウアサゴの行き先を辿ろうとしたが、当の本人から「俺はいいから先に行け」と言われたので、絢斗は再び前を向き機体

を前進させる。

たが心機一転と進み出した絢斗の目の前からは、運悪く絢斗がいる方向へと薙ぎ払われるギガ破壊砲だった。

「シイイイイ!!?」

口から奇声を発しながらも、幾つもの修羅場を潜ってきた絢斗の本能が手を動かし機体を操る。プルシアンブルースターの四肢が躍動し、陸上競技の背面飛びのような綺麗な跳躍を見せスレスレでギガ破壊砲を回避する。

しかし危機が去つたのはその一瞬のみ、地球の重力に引かれプルシアンブルースターは徐々に下へ落ちていく。

「飛べえええ!!」

——だがそこで諦めたらもれなくギガ破壊砲の餌食となるため、そんなのはゴメンだと奮起した絢斗はプルシアンブルースターに対し【思い切りブースターを吹かせ】と指示を下し。それに呼応したプルシアンブルースターのスラスターが火を吹き、その巨体を押し上げる。

「~~~~ッ!!」

急制動と重力に逆らった故のGを直に感じながら数メートル先のビートルキングをしっかりと見据えていた。

ちよつとでも手元が狂えば光と化す一種のチキンレースは、勇気と覚悟。それとほんのちよつぴりの狂気を持って制した絢斗に軍配が上がった。

「——これでッ!」

「なんだと!?!」

ジャンプしてからビートルキングに到達するまでの間、ちょうど綺麗に縦一回転し（結果的には）華麗にギガ破壊砲を避けてみせた絢斗はその手に持っていた長距離陽電子砲を片手に持ち、刹那の瞬間に狙いを定め発射する——しかし。

「クソ！副砲か!!」

「ッ…九死に一生を得た。というところか」

主砲を撃ち抜くはずだったその攻撃は、刹那故の甘い狙いとなって

しまい。主砲の【ギガ破壊砲】では無く副砲の近接迎撃銃【ヒートカット銃】だった。

（だけど、コレでギガ破壊砲は乗り切った！後はそのままもう一回撃ち込めば——ッ!?）

『【ギガ破壊砲】には長大な再装填時間が必要』そんな絶対の法則を破る様に、ビートルキングの主砲からは「パチパチ……！」とオレンジ色の閃光と、強大なエネルギーが集約していた。

（嘘だろオイ!?コンバット・ハイになって時間感覚が多少狂ってたとは思うけどそれでもあり得ないはず!）

「…安心しろ。何もお前が時間を誤っていた訳ではない」

「え?……まさかお前ツ!?」

——余談だが、【ギガ破壊砲】搭載機にはこんな但し書きがある。

『本機に搭載されている【ギガ破壊砲】は我が社の技術の粋すいと社員達の熱い心を搭載させた超強力主砲です。』

『威力、射程共に世界最高クラスのものだと自負しておりますが、ついでには使用にあたり次の事を絶対にしないで下さい』

『1. 【ギガ破壊砲】と本機のオプション装備以外の武装を搭載しない（下手に全弾発射しようものなら車体がひっくり返ります）』

『2. 【ギガ破壊砲】にて発生した被害を我ら『地中海複合企業』のせいにしなない』

『3. 【ギガ破壊砲】の蓄積チャージが終わる間に、【ギガ破壊砲】を無理やり発射しないで下さい（この警告を顧みずに発射した場合主砲が焼き切れ行き場を無くしたエネルギーが集約。結果自爆します）』

『以上の事を踏まえて使用すれば、本機は貴方に多大なる戦果を約束します。それでは、良い戦闘を』

——地中海複合企業より』尚今回の説明文は作者の完全妄想です。そこんところご了承ください

「まさか……自爆する気か!？」

「そのまさかだ……お前のような一流の戦士を俺一人の魂で奪えるというのなら、有り難い!」

「……巫山戯んな!!」

急いで離脱しようとするが、つい先程までビートルキングへ向かって突貫していたプルシアンブルースターは簡単には止まらず、未だに徐々に近づいてしまっていた。すわ万事休すかと思ひ。咄嗟に目を瞑った絢斗だった……

「——人の後輩を、心中相手にするな!」

そんな時…上空に打ち上げられた後丁度いいとばかりに上空から絢斗達へ接近していたベカスの声が響く。

いつの間にかバーブの死角へと忍び寄っていたウアサゴの実体剣が爛々と輝く。

「なにっ?」

「美味いトコ貫っていくようで悪いが…これでトドメだ!!」

その際、バーブは灰色になった視界ではつきりと見る事が出来た。

目の前の状況が未だ飲み込めず、呆然とした表情の絢斗。

自分を討ち取る歓喜か、それとも言葉通り自分の後輩を命の危機に瀕させた怒りによって目を怪しく輝かせるベカス。

そして、自分に向かってゆっくりと、されど確実に迫る実体剣。

(…どうやら、ここまでらしい)

バーブがとった最後の行動は、苦し紛れの回避でも、道連れのための攻撃でもなく。自身が信じる真なる神に祈りを捧げることだった。

(ああ神よ……今御許へ向かいます)

迫る実体剣を最後まで見ることなく静かに目を閉じたバーブ。

「ここだけの話。原作キャラを殺す様な覚悟はないんだよね」by作者

「させるかああアアアア!!!」

「なにっ?」

今まさにバーブのビートルキングにウアサゴの実体剣が突き刺さ

りそうになった時。つい先程まで英麒と戦っていたはずの女性パイロット【トウヤ】の駆るセンチピートルによる突進が、ウアサゴに直撃。

「ウオオオオオオ!?」

「えつちよつと待つ——ゴハッ!?!」

弾き飛ばされたウアサゴに、ピンポンボールの様な形で追突されたプルシアアンブルースター。両者もろとも砂漠の上でゴロゴロ転がりながら数十メートル程まで飛んでいった。

「ウゴゴゴ——英麒はどうした!?!」

「知りませんよ! やられたんじゃないですかッ!」

「馬鹿なこと言ってるじゃねえよ」

声が聞こえてきた方向にベカス達がバツと振り向くと、そこには岩の上で悠々と佇むアキレスと英麒の姿が——!

「……裏切りか?」

「違う。俺はただ単に疲れたからあの女を倒さずに通しただけだ!」

「……………」

怒り半分呆れ半分といった感情のベカスと、喚き怒り散らすことはしなかったが静かに長距離陽電子砲をアキレスに向け始める絢斗。

「トウヤ。今のうちに撤退しよう」

「……そうね。私も同感だわ」

味方同士で火花を散らす三人を尻目に、撤退のチャンスだと判断したバーブとトウヤは、撃破対象の陸上戦艦が遙か遠くへ行ってしまうたこととこれ以上の消耗は下策という事を理由とし、さっさと撤退していった。

「イイ度胸だゴラア!! そんなに喧嘩がしたいんなら付き合ってやる!

ベカスさん【デュエル】開始の宣言をオ!!!」

「おつ。たかが雑魚を脱却したばかりの奴が俺に敵うとでも?」

「おい絢斗落ち着け——」

「敵うか敵わないかを決めるのはお前じゃない俺だあ!! 人造の天才舐めんなア!」

ふと振り向いたトウヤが最後に見たのは、太陽を背にアキレスへと

飛び掛かるプルシアンブルースターと、それに対し軽く構えるアキレスという。なんとも言えない光景だった。

☆【割り切れる事】

「ハー……機体性能の差で勝ったようなようなもんだよアレじゃ」
「……………」

「親父。ビールもう一杯」

何時ぞやの酒場では、苛つきながらテーブルを突く芦名絢斗と、剣山のような殺気を隠す事なく発し続ける英麒。そして呑気に酒を呷るベカスの姿があった。三人とも発している気配はそれぞれであり、特に絢斗と英麒は今すぐにでも立ち上がって殴り合いを開始しそうなほどに険悪だった。

一重に今二人が同じテーブルにつき形式上一杯やれてるのは、「俺が出すから」と二人を強引に酒場へ連れ込んだベカスの実績に他ならない。

あの後指揮官ノリスが駆る陸上戦艦にて合流した三人（この時すでに絢斗と英麒は険悪な雰囲気となっていた）は、約束の50万ゴールドの報酬金と、先の戦いで見せた実力を買われ。反ワカ連合軍の事実上最強戦力【十二巨神 アヌビス】と、その適合パイロット【アヌビスの花嫁 ナディア】の暗殺任務だった。金に困窮していたベカスと、憂さ晴らしがまだ済んでいなかった英麒はこれを快諾。唯一渋った絢斗も、ノリスからの熱い説得と報酬金とは別口で用意された「国を挙げての情報捜査」という今の絢斗からしたら美味しすぎる報酬を吊り下げられ、了承した。

「作戦内容はそちらに任せる」という言葉とともに解散させられたベカス達は、今こうして前述の酒場にいた。

「たのもー！……ヒェ!？」

そんな時酒場の扉をバタン！と開き、幼さが残る顔立ちの少女が入ってくる…が、酒場の中央にて苛立ちと殺気を撒き散らす絢斗と英麒の迫力に、思わず変な声を出した。

しかしそれを笑う人間はいなかった。というか険悪な雰囲気の中、絢斗と英麒（ついでにベカス）を揶揄う奴はもれなく地面のシミとなる

か壁の装飾と化していたのだ。今も酒場で酒を飲んでいたのは、シンプルに酒を飲みに来た一般人と三人の実力に気づいた賢い奴らだけだった。

「え、ええ？……あ、いたー！」

困惑を隠せず狼狽る少女だったが、それでも己の目標を忘れずにこの酒場内に居るはずの「ターゲット」を探し、発見した。

少女はツカツカと絢斗達のテーブルへ近寄ると、ズビシッ！という擬音が付きそうなほど勢いよく英麒へ指差す。

「ついに見つけたわよ。英麒ー！」

「……………あ、あ？」

英麒は最初自分が指差されていることに気付かず、ベカスからの視線にて漸く少女が自分に用事があるのだと認識し……虫の居所が悪かったため普段より数段ドスの効いた声を出した。

「……………」

「んだオマエ？俺になんか用かよ」

少々瞳に涙を浮かべているかのように見えなくもない少女が黙り始めた事に英麒も怪しみだすが、少女は尚黙っていた。

「……………ねえちよつと」

「ヒヤイ!?な、何よ……？」

さすがに見かねた絢斗が軽く少女を小突くと、漸く再起動リブートした少女——シャロが軽く怯えたような仕草で絢斗の方を見てきた。

「取り敢えず。アイツ……英麒に用事があるんだよね？言わなくていいのか？」

「そ、そうね。そうだったわ……」

「コホンー！」と気を取り直した少女は、再び英麒へ指を突き出した。

「英麒！アンタにはシチリア島のマイク兄弟から懸賞金100万を出されているのよ。表に出なさい!!」

「マイク兄弟い？……ああマフィアの？思ったよりケチなんだな」

殺気が幾らか霧散した英麒は、それだけ言うと言席から立ち上がった。

「で、お前が俺を捕まえに来た賞金稼ぎってか？生憎とガキを相手す

るシユミはなくてな〜」

「な、なんですつて!?何がガキよ!!」

その後口論を続ける英麒とシャロを見つつ、絢斗はそそくさとベカスへ顔を近づけ話し掛ける。

「ベカスさん知ってます?喧嘩って同レベルの存在でしか起こらないらしいですよ」

「…何が言いたいんだ?」

「分かるでしょう?」

「ニコオ…」という擬音がつきそうなアルカイックスマイルを見せる絢斗に対し、内心「だがそれに当て嵌めると英麒と喧嘩してたコイツは…いやよそう」と己の考えを握り潰した。

そうこうしていたら遂に怒りのボルテージが怒髪天へ到達したシャロが「表に出ろ! (意識)」と英麒へと言い放ち、それに対して英麒が「今ちよつと機嫌悪いからやり過ぎても文句言うなよ? (直喩)」と返し、二人揃って酒場の外へ出て行った。

「俺たちも行くぞ」

「ですね。是非ともアイツには負けて欲しいですが…難しそうだ」

そう言い二人とも英麒達について行く形で酒場を出ようとしたが、そんな二人を「待てよお二人さん」という野太い声が引き留めた。

「なんだマスター?金なら前払いで済ませただろ」

「…酒代はな。この状況はどう収集つけるんだ?」

「あー……」

酒場のマスターが親指で数カ所の地面を指差す。そこには絢斗達に喧嘩を売った挙句ものの見事に返り討ちにあつた傭兵崩れや荒くれ者の体と、その戦闘によって破損したテーブルや壁があつた。

「…ここは俺が払つとききます。元を辿れば原因は俺ですし」

「そうか?よし頼んだ!」

街中でのBMバトルは勿論御法度のため、カイロ郊外へと行った二人を追うため駆け足で店を出たベカスと、「…現金だと今持ち合わせないので、カードでいいですか?あの人達は適当に裏路地に捨てとくんで」と申し訳なさげに財布を開く絢斗の姿は、ひどく対照的に見

えた。

☆【出自】

「まあそんなに気にしない方がいいよ？引き摺り過ぎると仕事に影響出ちゃうし」

「そんな事は分かってるけど…ウツ〜！」

カイロからしばらく離れた遺跡群では、現在「ヴァサゴ」VS「アキレス」の【花嫁の暗殺】を賭けた【デュエル】以下原作から抜粋：
【BMデュエル】民間では、BMのパイロット間で確執や対立が起こった場合、その解決手段として【BMデュエル】がしばしば採用されている。またデュエルの結果もほとんどの国家が認可している。

【BMデュエル】には【ノーマル】と【デスマッチ】の2種類がある。そのほとんどは【ノーマル】であり、相手の生命まで奪うことは許されていない。デュエル時には第3者が立会人を務める。

【デスマッチ】は両者どちらかの死亡によって決着がつく、まさに命がけの対決だ。【デスマッチ】は多くの国家が法律で禁止している。だが、グレーゾーンの無法地帯では【デスマッチ】でのデュエルが一般的が行われていた。因みに現在はアキレスに剣を蹴り飛ばされたヴァサゴがアキレスへ向かって強烈な右フックを喰らわせ、ベカスが一步リードと言ったところである。

近接型（尚一方は本来遠距離型）のBM二体が至近距離で殴り合うというなんとも泥臭い戦いの脇で、銀行の預金残高ぎ少し軽くなった絢斗と、英麒との戦いにて敗れてしまったシャロが二人揃って端のベンチにて二人のデュエルを見物していた。

「うう…：やっぱり遠距離一辺倒じゃダメなのかなあ」

「…いや正直あの二人が異常なだけで並の賞金首なら君の腕で十分だよ。」

因みにこれは依怙鼻肩無しの感想だ。シャロの近接戦闘は確かに甘いところも見受けられる程度だったが、逆に遠距離戦は稀に絢斗を唸らせる程の冴えを見せる機会があった。特に終盤でのネット弾によるアキレスの拘束からの一斉射撃は手に汗握る程の迫力だった――

—まあその後亀甲の構えにて防ぎきったアキレスの反撃によって決着していたが——その為、英麒の様な【例外】を相手にしない限りは問題ないと絢斗は言ったが……………

「あ、あたいは『並』じゃイヤー！」

強い意志をもつてそう言ったシャロは、背中に背負ったカーキ色のリュックサックから…大分読み古されたのであろうそこそこ大きな本を取り出した。

「この本知ってる!？」

「…題名だけなら、確か【伝説のハンターの冒険記】」

「あたいはこの中のハンターみたいなの超一流の賞金稼ぎになりたいんだ！だから『並』じゃダメなの!!」

「へえ…まっ目標があるのはいいい事だよ。じゃあ成長する為にも、目の前の戦いを見ようか。『超一流』とはいかないけど、あの人達は間違いなく『一流』だ」

「もっちろん!…………あれ?貴方は?」

「…俺はちよつと違うかな」

「でもでも、貴方のこと雑誌とかで見たことあるわよ?【Aを^{エース}超える

^{ダブルエース}

A A!ソロでありながら多数の高ランクBMを使い熟す新生パイ

ロット】って」

「うーん…まあ、その通りなんだけど」

どこか困り気味に、そして後ろめたそうに後頭部を掻く絢斗は——
徐に右手首を見遣る。

「……………?」

その動作に疑問を感じたシャロは、絢斗の視線を追うように彼の右手首を見るがそこには何らかの物体はおろかタトウーやリストバンドの類もなく。ごく一般的な手首がそこにあった。

(いや…よくよく見るとなんか違う?)

ナニに対して疑問を抱いたのかは分からなかったシャロだが、幼さ故の好奇心でそろそろと絢斗と右手の手を伸ばそうとするが……………

「ん…そろそろ決着だ。最後ぐらいはちゃんと見よう」

そう言う服を捲り再び袖の中へ手首を隠し、姿勢を整えた。

「……………むー！」

「ゴメン。こればかりは軽く言えるような事じゃないから」

申し訳なきように片目を瞑りウインクすると、ドローンや携帯地雷で逃げ道を防いだウアサゴの強烈な勢いのコークスクリューブローが装甲の一部を千切りながらアキレスを薙ぎ倒したところである。

「…よくよく考えると近接とは言え剣を持つてはるはずのウアサゴと遠距離特化BMのアキレスが拳で殴り合ってるのって結構アレな光景じゃない？」

「ア、アハハ…」

なんやかんやあって（投げやり）ベカスの勝利にてBMデュエルは決着。「機体性能低い…低くない？」と数十時間前も同じような事を言う英麒に対し「次があるさ」とベカスが言うと「取り敢えず俺実は身分詐称してるからそろそろ逃げるわ」と驚愕の事実を発し、次いで「次会った時は…お前を殺す（デデンー）」と純度100%の純粋な殺気を絢斗に打つけ英麒は帰っていった。

「おーおー。良い友人を持ったじゃないか？先輩は嬉しいぞ〜」

「あんな殺意マシマシな友人死んでもゴメンなんですけど!？」

☆【三度】

「あゝあゝあゝあゝあゝ!!!」

現在絢斗がいるのはカイロ郊外の遺跡…といってもベカスと英麒がデュエルをしていた所とはまた別の場所である。因みにそこで絢斗は再びプルシアンブルースターを駆り、戦場と化した遺跡跡で複数のBMと戦っている。

敵機は絢斗が登場するプルシアンブルースターと同ランクのSSランクのBM。「パイモン」シリーズ各種であった。謎が謎を呼ぶと噂の【ソロモン工業】から発売されている現代では理解不能な【FSシールド】榴弾以外の遠距離武装…つまりはグレネード以外の遠距離武装（実弾とかビームとか）の殆どを無効化する謎シールド。というか『現代では理解不能』のシロモノをどうやって機体に載せたのか小一時間問い詰めたいを一定時間展開できる有能なBMである。かく

言う絢斗自身もシリーズの一つを一機所持している。

「味方なら頼もしいが敵になると厄介」という戦場の至言に則り、激しい弾幕と強烈な近距離戦。そして以前戦った盗賊団よりも数段高度な連携に絢斗はヒイコラ言いながら応戦している。

近接型には銃撃…は時折発生するFSシールドに阻まれてしまうので素直に近接戦で応戦し、ひっきりなしに飛んでくる銃弾には高機動型の名に相応しい動きで躲し、いざ囲まれた時は冷気を最大出力で噴射。凍り付き動きが鈍くなった瞬間に包囲から離脱する。

特殊階級「AAランク」に恥じぬ程の操縦技術と度胸で圧倒的に不利な戦況でもがく絢斗だが、そんな彼も自分の搭乗機と同程度のスベックを持つBM軍団相手に、かなり疲労していた。額には玉のような汗をかき、目は一瞬一瞬を見逃さまいと充血している。

「ああもうキツツイ!!」

——この戦いは、とあるメッセージから始まった。

『消耗したから助けてくれないかしら?』

「だからと言ってこんな状況だとは聞いて無いッ!」

依頼主スロカイの要請にてノコノコと遺跡群に顔を出した絢斗が目撃したのはラクダの背中に乗ったスロカイと、その前に座っていたロープを纏った年齢どころか性別すら不詳の人物が懐から出した拳銃で今にもスロカイを射殺しようとしたところだった。

「……ッラァー!」

最初の第一射はスロカイが所持していた「ダークラビット」くん決死のブロックにて阻止。第二射は拳銃を視認した瞬間岩陰から飛び出た絢斗（生身）が所持していた機械刀にて拳銃を両断した事により無為とし、そのままロープの人物を引き倒す様にラクダから引き摺り落とした。

「教廷騎士!?!……いや違うな。何の用だ!!」

ロープの人物これから「黒衣の男/女」と描写しますが内部機構が露見した拳銃を投げ捨てると、腰にある大型ナイフを構え絢斗に斬りかかる。

「この……！」

ラクダ一頭分というほぼゼロ距離に近い間合いでは、1メートル近い絢斗の機械刀よりも黒衣の男の30センチより少し小さい程度の大型ナイフでは後者の方に軍配が上がる為、自身に向かつて縦横無尽に振るわれるナイフを刀の峰や刃元で弾きひたすら耐えるという防戦一方の状況だったが――

「凡人。頭を下げよ」

「へっ？……てうわっ！」

スロカイの言葉に従い頭を下げると、絢斗の少し上から鉄の塊――古代遺跡にて放置されていた用途不明の機械群を固めたもの――が頭を軽く掠めながらも猛烈な勢いで飛んで行った。

「ゲホアア!!」

そのまま鉄塊の延長線上にいた黒衣の男に激突し、見事な錐揉み回転を披露しながら吹っ飛んだ。これこそがスロカイの持つ究極能力者としての力の一端……【ロードエンブレス教皇見参】機械限定なら何でも出来るやべー超能力。機械に命を吹き込んだり手で触れた機械の操縦方法を完璧に把握したり適当な残骸で高スペックBMを造作したりと凄まじい能力を持つによるものだった。

「……フン。他愛もないわね」

「た、助かりました」

呆然とした様子でスロカイと黒衣の男へ交互に視線を巡らせる絢斗だったが、抜いた機械刀を鞘に納め数個のボタンを弄る。

「よし。このレンジなら負けない……！」

次いで鞘から刀を抜くと、そこから放たれたのは「バチバチ！」と如何にもな接触音を鳴らしながら現れた【雷撃を纏った刀身】だった。「情報聞き出したいので気絶させますけどいいですよね？」

「それは構わぬが……出来るのか？そんな小さい武器で」

そうスロカイが言った瞬間。遺跡のあちこちから数体の完全武装済みのBM――パイモン達サイズが現れた。ふと正面を見ると先ほどまで同じ大きさ、同じ重さウエイトで戦っていた黒衣の男すらもどこからともなく現れた【パイモン剣装型】に搭乗し、コチラへ向け剣を突き出して

た。

「……………オラア！」バフン！

無言で刀を鞘にしまい。その後絢斗は地面に向けて特濃スモークグレネードをぶん投げ敵方からの視線を一時的にきる。

「〈チエン——」

「待て凡人。それは後に取っておくといい」

「…いやでも、ここからプルシアンブルースターア　レを取りに行くには距離が——」

「コレの事か？」ズウウン

「……万能ですね」

「それほどもあるな」

「ひとまずオレはコレに乗って迎撃に出ます。貴女は？」

「フム：手慰めに機械弄りでもしていよう。出来次第知らせる」

そう言うくとスロカイは虚空へ向けて指揮棒タクトを振るう様に両手を振るうと、遺跡周辺の建造物や戦闘によって周囲一帯に放置されていたBMのパーツが意思を持ったかのように蠢き始める。

まるでプラモデルの組み立て動画を見ているかのような速度でカチャカチャと出来上がって行く赤黒い機体を見て絢斗は軽く冷や汗を流す。

「よし行つてきます。そろそろ煙幕消えるので今の内にそのBMの背後などに避難を！」

「了解だ。精々引き寄せておいてくれ」

すでに起動状態にあったプルシアンブルースターを立ち上がらせ、煙幕が晴れない内に奇襲をかけるため、絢斗は螺旋射撃の用意をしながら煙を突き破り敵へと迫る。

「シヤアア!!」

ロングランスプルシアンブルースター（長い為これより「プルシアン」と表記）の長槍が閃き、自身へ向けて刺突を企てていたパイロン剣装型の装甲をカウンターの要領で貫く。

『舐めるな傭兵！』

程ランクBMであればその場で終わっていてもおかしくはなかつ

だが、絢斗が相手取るのは現在の搭乗機と同ランクのパイモンシリーズ。一撃で撃破には至らず逆に槍をしっかりとホルドされたまま逆の手で斬りかかれる。

「そつちこそ…なー」

至極冷静に挑発し返した絢斗は先程までしっかりと握っていた長槍をあっけなく放し体の自由を確保すると、すり抜けるように相手の剣撃を避ける。

「押してダメなら——」

プルシアンが脱力したかのように両腕を下げ、徐に右手が上げたかと思うと…まるでバネに弾かれたかのようなスピードで放たれた正拳突きがパイモン——

「——もつと押せ!!!」

の胸に刺さっていたプルシアンの長槍と激突する。更なる衝撃を与えられた長槍はそのままパイモンの体をえぐり突き進み…やがて一つの穴を穿った。

『何だと!?!』

「人を呪わば穴二つ!—という訳でも一つ追加だ!」

『ぬぐう…い!』

貫徹の衝撃で地面に倒れ込んだパイモンに対し、いつの間にか長槍を引き抜いていたプルシアンはクルリと槍の穂先を地面パイモンへ向け突き刺す!

先程とは違いBM自体のフルパワーと機体の重量を合わせた一撃はパイモンの装甲を易々と突き破り、長槍を支柱としてパイモンを地面に縫い付けた。

『お前副長をバカにしているのか!』

『死ねえ!!』

義憤とシンプルな殺意を持って絢斗へ向けて走る【パイモン剣装型】と自己流なのか螺旋馬ドリルランス上槍を携えた剣装型が互いの間合いを保つたままそれぞれの武器をプルシアンへ向け放つ!

「——よつと」

『ハア!?!』

が、長槍を一つの大きな棒と見立てた絢斗操るプルシアンが新体操じみた動きで長槍の上に腕二本でバランスをとり前者の剣を、後者の槍を回避する。

次いで「ホッ」という掛け声と共にプルシアンの身体が中に浮かぶ。最頂点に届くと徐にブースターを少しふかし回転を加え落下。剣装型へ迫り――

「ムーンサルトプレス」ゴシヤア！

先程の正拳突きの比ではない轟音がパイモン剣装型の厚い胸部装甲から響き渡った。

「回転による貫通力」＋「数十トンの物質の自由落下」によって飛躍的に威力を向上させたソレプロレス技の一種。見栄えがいい為使用者は多いが使う側受ける側共に危険が伴う。コレの使い手として有名な武藤敬司氏はコレの連発によって満足に歩けなくなるレベルで膝に負担を強いたは、パイモンの装甲を越え中身のパイロットを昏倒させるレベルのダメージを与え、見事に相手を「K.O.」してみせる。プルシアンは崩れていた己の姿勢を整えると、最後に残った一機から大きく距離を取った。

『っ！ガイラ…ニメエエエ!!』

自身の背後にある僚機達の亡骸（※死んでいません）の見て激昂した槍持ちのパイロンのパイロットは、その両手に構えた螺旋^{ドリル}馬上槍を振るいプルシアンの方へ向ける…その後パイモンを中心として半透明の水色の膜が展開された。

これこそがパイロンのフレーム特性機体毎の特殊能力。新機体が出る度にインフレしてるような気がしなくもない「FSフィールド」である。これだけでパイモンのパイロットはプルシアンの遠距離武装の一切を無効化した事になるが…変化はこれに留まらなかった。

『お前は…確実に葬ってやる！』

パイロットがそう宣言した瞬間、FSフィールドに変化が起きた。まず、本人を守るハズのFSフィールドがBMから離れフヨフヨと浮遊し始めた。

続いて球状としての形のしていたFSフィールドが崩れ捻れてい

き、その形を変えてゆく。

最後に、パイロンが持っていた螺旋馬上槍ドリルランスへ吸い付けられるように、捻れた結果螺旋ドリルのようになったFSフィールドが纏わり……否、装着された。

『食らつとけ…《アブソリユート・ステインガー》!!』

余談だが、【FSフィールド】の効果は「遠距離武装一切の無効化」である。そこでパイロットの技——【絶アブソリユート対の貫通ステインガー】という名前と共に一つの疑問が生じる。

……果たして、その攻撃によって生まれたB.Mの破片や破れた装甲はどういった扱いになるのか？

(この技は俺の螺旋馬上槍ドリルランスによって貫かれた装甲や破片の一切をFSフィールドの効力によって強制的に弾く！コイツの装甲の硬度がどのくらいあるのかは分からないが……それはやらない理由になりえない！)

つまり彼の攻撃は、螺旋馬上槍ドリルランスによって貫ける物ならそれがどんなに厚い物でもバターに熱したナイフをあてるように貫けるといふ事である。

『くたばりやがれエエエ!!』

絶対貫く、死んでもクロス。とい絶殺の決意を固めたパイモンのパイロットと、主人の命を承ったパイロンが絢斗のプルシアンへ迫る。

一秒後、スタートダッシュが成功する。

二秒後、槍の先端が間合いに入る。

三秒後、自身も間合いに入りきる。相手の動作一つすらも己の掌上なのではと錯覚を覚える。

四秒後、【突き】を放つために保持していた槍を腰溜めに構える。

五秒後、一気に槍を打ち放つ。

六秒後、槍が敵に当たる前に止まった。

『……………?』

何故か進まない槍に、彼は不思議に思いつつも更に突き出そうと……しかし、パイモンは動かない。

……まるで「地面に縫い付けられた」よう。

『なあっ?』

途端に、コクピット内からダメージリポートが吐き出される。肩部胸部腰部脚部爪先と、数々の場所から損傷したという内容がパイロットに知らされた。

『どうゆう……ッ!?!』

疑問が脳内で弾け続けるが、パイロットの青年は一旦それを無視し機体の全体図を表示する。するとそこには健常な状態を示す青色が大部分を占める中、ダメージを受けた事を示す赤色の部分が縦一線に刻まれていた。

『何っだよコレ……!』

辛うじて無傷だった首を動かしダメージを受けたところを見ると、そこには一本の長槍があった。しかしそれは彼の槍ではない……目の前の敵の槍だった。

『……………!』

「《パラドックス・ステイング》」

そう絢斗が言ったのを皮切りに、甚大なダメージを受けたことによつて強制的にスリープモードに入ったコクピットが暗闇に覆われた。

より肥大化した螺旋ドリルが、プルシアンに迫る。上記の物から文字通り絶対の刺突と化したソレを、コクピット内の絢斗は

——特に何もしなかつた。

ブースターを吹かす事もなく。

操縦桿を握り直す事もなく。

足組んでリラックスした。

「…ズルイから使いたくないんだよな。コレ」

複雑そうな表情でそう呟いた絢斗は、フウと深くため息をついた後に「でも…個人的な闘争ならともかく、コレは依頼だからな」と言い、ゆっくりと目蓋を開け、徐に虚空に手を伸ばし、何かを手繰り寄せるように引つ張った。

「——《コール》」

絢斗はこちらへ向け迫っている槍でも、槍を突き出しているパイロンでもなく。絢斗が見ていたのは最初に撃破した「パイロン剣装型」に突き刺さっていたプルシアンの長槍だった。

因みに読者の皆様は気づいているだろうが、絢斗自身も能力者である。細かい出自は今はまだ言えないが、彼の能力は大きく分けて二つ。

一つは初回で見せた《チェンジ》。戦況に合わせてBMを乗り換えられる便利な力だが、こちらには一日一回の制限がある。

もう一つは《コール》コレは簡単に言えば《チェンジ》のマイナーチェンジ。効果はより小さいもの——武器の取り寄せ。BMだけではなく、生身でも使えるが……今はそんなことはいい重要な事じゃない。

「《パラドックス・ステイング》」

本来なら武器を手繰り寄せる事だけに使うこの能力を、絢斗は今回「意識外からの奇襲」として使った。本来ない場所から出現すること、先程のパイロットの《アブソリュート・ステインガー》から単語をもらい、技名は「パラドックス ステイング 異次元の刺突」。

ぐずれ落ちた槍装備のパイモンを見遣り、絢斗はふと視線をあげる。

「…普通今ので打ち止めでは？」

視線の先には数十体のパイモンがいた。

決戦の気配を感じたため、闘気を高めるが——

「出来たぞ凡人。よくぞ耐えた——《機械神の咆哮》」

直後発射された極太ビームによって粗方焼き尽くされた。

【砂漠の迷い子】

「お前が思いの外時間を稼いでくれたからな。なんとか間に合った」
 「…能力者とは会った事あるし、戦った事もありますけど。ここまで大規模なのは見た事ないです」

呆然といった様子で、絢斗は目の前の巨大BM——スロカイの
ロードエンブレ 教皇見参によって組まれた機体を見上げた。

最初のビーム斉射によってパイモン軍団の七割が融解（機体自体はともかくビームの発射機構とそのエネルギーはどっから調達したんだよとか言っではいけない）し、残った三割も、巨体故の体格に任せられた体術と機体各部に設置された重機関銃（だから実弾はどっから出したとか以下略）によって、瞬間に壊滅の憂き目と相成った。

「…アイツら。逃していいんですか？」

「問題ない。第一襲撃者の正体は大方承知している」

「そですか…というか。幾ら探し人の名前を出されたからってこんな如何にも「畏がありますよ」って主張している奴らについていかないで下さいー！」

「……撃退できたから問題はない」

「そーゆう問題じゃ……」

そんな押し問答を繰り返していると、絢斗はふとあることに気付いた。

「あの……もしかして、疲れています?」

「——何のことだ?」

「映像の立ち姿。僅かですが揺れています」

「…そんなことはない」

「声音に疲労が隠せてません」

『疲れてなどいない』

「あのワザとやっています!?!」

凶星だったのか背もたれに背をつけボイスチェンジャーを使い始めたスロカイに対し、思わず突っ込む絢斗だったが、脳内では「疲れ

てるだろうしこのぐらいふざけてる方がいいだろう」と考えている。
(…まあそれ抜きにしても、俺が依頼を受けてからもう二日。焦つても疲れていてもしょうがないか)

「いよいよもってなりふり構ってられない」と脳裏にとある老情報屋の姿を思い浮かべる。

(ひとまずは休息が先決。俺も応急処置でもいいからプルシアンの修理をしないと…)

そう思いつつプルシアンの操縦席から出てきた絢斗——ここで彼は機械のカメラ越しでは気付けなかった事実^に漸く気付いた。

「機体が、揺れている?——まさかッ!」

その言葉がキツカケとなったのか、突如としてスロカイの搭乗する巨大BMが崩壊を始めた。

無論絢斗は依頼主を助ける為に必死になって駆けるが、ソレは崩落し続ける巨大BMの残骸によって阻止される。

「っ!邪魔だッ 《チェンジ》!」

残骸を避ける暇すらもないと判断した絢斗は、手頃な岩を蹴り大ジャンプ。虚空へ向けて手を伸ばすと、絢斗を中心に謎の光が迸り—

「砕けるオ!!」

——次の瞬間光を裂いて現れた【パイモン格闘型】の力強い拳が巨大BM——不便なので【ロードエンプレス】と呼称する——の残骸を粉々に吹き飛ばした。

前衛型と、なにより高ランクBM特有の機体性能をフルに活かし灰色の軌跡を描きながらスロカイへ向かって手を伸ばす…が。

(マズい…! 間に合わない!?)

彼が咄嗟にそう判断が出来る程度には、パイモンとスロカイの距離は離れていた。ブーストゲージも残り僅か。正しく窮地である。

(クソこんなことなら【■■■■】にすれば…いやそもそもアイツはまだ建造途中だったな…いやそんな事はどうでもいいんだよ!? 何とかしないと——ツ!!)

混乱のためかおかしな方向へ意識を飛ばす絢斗だったが、本格的に

スロカイが危機的状況に陥った時。絢斗の脳裏には一つの記憶が脳裏を駆け巡った。

〈それは、■まりの記憶

〈■験■の中にいた■を

〈助け■くれた■のヒーロ■の姿で

〈その姿■泣い■て

〈とても■もし■と■言えない■ども…

〈■っこ■■——

「——違う。違うだろ芦名絢斗ッ！」

彼の脳裏に過った救われた記憶を、彼は彼自身の手で振り払う。

(憧れるのはいっつ…！)

思い焦がれるのもいい…！

でもだけど…だからこそッ!!

また求めるのは違うだろうが!!)

この場にいるのは自分だけなんだと気鋭を吐く。

何にも終わってないのに勝手に諦めるなど自分に激昂する。

救われたのなら救って見せろと己を叱咤し喝を入れる。

跳べ、翔べ、飛べ！腕が千切れるまで手を伸ばせ!!

奇跡だろうが悪運だろうがどうでもいい…そんな万分の一を、手繰

り寄せろ！

「《コール》……ッ！」

機体のブーストが切れた瞬間に、絢斗は手を伸ばす。機体のメインカメラに移るのは、プルシアンブルースターの槍と、ガラハツドの軽盾だった。

「ハハ…『俺を踏み台にした!』ってことか……上等！」

ブーストが切れた瞬間。パイモンの脚部を目一杯伸ばし、二つの武装…いや足場を足を掛けソレを全力を持って蹴り飛ばす。

もちろん蹴飛ばされた武装は作用反作用の法則で吹き飛んで行くが、逆を辿ればパイモンの肢体も作用反作用の法則に則って少し浮かんだ……そしてその『少し』は、目の前の依頼主スロカイを掴むには十二分なものだった。

「届けえええええー！」

自分と少女の手を握る——ともれなく少女の手が圧碎機にプレスさせたようになってしまいかねないので、揺り籠で包む様に両手で少女を受け止め、転がる事で地面に衝撃を最大限逃しながら地面に着地。

「大丈夫ですかスロカイさん!？」

急いでBMから飛び降りた絢斗は遠隔操作でパイモンの重ねられた腕を解かし、中に居る少女に目を向けた。

「……よかったあ」

内部を見た瞬間思わず地面に尻餅をつきながら絢斗は深く安堵した様にため息を吐く。

中には布面積が多い故肌が見難いため外傷や打撲の類いは確認できないが、顔が貧血や疲労時特有の蒼白気味な顔が少々不安を掻き起こすが、大方健全な様子のスロカイ（気絶）がそこにいた。

「さて、と……こりゃ酷いな」

そう言いパイモンから少し離れた位置まで移動すると、そこにあった武装……否武装だったものを見つめた。

「……ありがとう。お前らのお陰で俺は一つ救えたよ」

パイモンの超重量級の機体重は、片足ずつに分散されたと言っても武装達に多大な負荷を強いた。

プルシアンブルースターのライフルは中程から綺麗にへし折れ、最早銃器としての機能が廃されたのは明らかだった。

軽盾は綺麗な五角形を描いていたカイトシールド 盾はその形から、盾としての体裁はまだあるものの。衝撃と圧力によって円形のラウンドシールド 盾と化していた。

「もう買い直した方が早いなコレも……」

少し前の筈なのにとても遠くに感じる盗賊団との戦闘にて片腕を

大破したラヴアハンマーに今回の破損と、ここ最近の想定外の出費に顔を顰めながらも……絢斗自身には欠片の後悔もなかった。

「…取り敢えず療養が先か。情報集めはそのあとでも出来る！」

内部で眠っていたスロカイを運び出し。——流石に女性を引き摺って行く訳にもいかない為、申し訳なさを感じながらも横抱きにして運んだ——遺跡を訪れる際に載ってきたミーティアMK3に入り、カイロへと戻っていった。

☆【情景】

「さっさと宿取らないと……！」

カイロの繁華街にて、トウクトウクに似た様な三輪自動車を駆り爆走する。

現在の絢斗は近くの宿に電話をしては「すいません現在満室なんです」という謝罪の言葉を聞きまた次の宿へ電話をかけ断られ——という病院をたらい回しにされる救急患者の様な有り様となっていた。

背後で青いを通り越して土気色になった（体調が悪くなつたとかではなく砂埃が付いただけ）スロカイを見る度に焦燥感を募らせる。

（マズいなあ…自分でもわかる程度には焦っちゃってる）

彼の冷静な部分は（「まあ落ち着けて、そんな時はヤシの実サイダー我らがオリ主の好物。彼は好んで飲用するが他の人に言わせれば「味薄いしなんかハッキリしない…どっちつかずの味してる」とのこと。因みに現実にも同名の清涼飲料水が実在する。作者は数回しか飲んだことないでも飲めばいい」と告げるが、彼の熱い部分は「飲んでる場合かア！」と冷静な彼を殴り飛ばした。

（……ひとまず、高台にでも行ってみよう。いい考えが浮かぶかもしれないしワンチャン知らないホテルが見つかるかもしれない）

例えばこれが絢斗だけなら、適当な場所を取って地面かベンチに雑魚寝すればいいのだが今は依頼主にして現世において最大最強の武装宗教団体である〈機械教廷〉のトップであるスロカイがいるのだ。今許されても後々「人外集団の巣窟」と噂の教廷騎士が肅清してくるのでやはり無理だった。

高台の上に着いた絢斗は、自分の着ていたコートをスロカイに羽織らせてから車外へ出た。

「やっぱ、そう簡単には見つからないか…」

高台から見る景色は、カイロの端から端を見渡せるのではないかと錯覚してしまいそうなほど広大で、煌びやかなネオンが眩しい地上と満点の星空が輝く夜空によってどこまでも明かりで照らされている光景だったが、それでも絢斗の目的である「空き部屋のあるホテル」は見えなかった。

「景色だけなら満点なんだけどなあ…ん？」

握っていた単眼鏡をズボンのポケットにしまおうとする絢斗は、ふとポケット内の硬い感触に気が付いた。

「コレは…成る程、一つ渡し損ねたみたいだ」

それは、絢斗の実家の味付き爪楊枝メーカーのロゴが印刷された甘苦製の爪楊枝だった。本来ならばカスに渡すはずだった——実際数箱分渡されたが、不運にもその一箱は彼のポケットに収まってしまったらしい。

なんとなくその一箱だけ残った甘苦の箱を見つめっていると、ふと絢斗の脳裏に普段から甘苦を愛用する銀髪のパイロットが写った。

「あー…いつもは使わないんだけど」

気恥ずかしいのか自分に言い聞かせる様にそう言った絢斗は、徐に甘苦の箱を開けながら一本取り出し——口に含んだ。

（…やっぱこの最初のエグミは慣れないな）

最初は無味だった爪楊枝だが、軽く噛んでいる内にアク抜きを怠った様な植物特有の苦味が顔を出し絢斗は顔を顰めるが、それに屈せず数分根気よく噛んでいると砂糖菓子じみたガツンとした甘さが顔を出す。

前述した最初の苦さや、何よりその嗜好品として見ても高い（なんと一箱2000Gする）甘苦製の爪楊枝だが、唯一の利点はコレが二週間近く続くことだろう……まあ大半は味に飽きて一日二日で道端にポイ捨てるのだが。

（自分のことながら、女々しいな）

本来なら自分一人の力のみで達成しなくてはいけないこの状況で知り合いの残滓に縋るような自分の行いを内心恥じる…が、その思いとは裏腹に彼の口は甘苦を吐き捨てることなく嘯み続けた。

(…まあ…)で捨てたら父さんに顔向けできないし)

もちろん言葉の通り預けられた頃よく見ていた楊枝一本一本を真剣に精査していた父親の姿を思い出したのは確かだが、絢斗がそうしなかったのは…お察しの通り彼の胸中には例の“知り合い”の姿がチラつき、彼の心を少し穏やかなものにしてきたからだ。そんな自分を自覚しつつも「仕方ないな」と甘ったれた己を諫めつつ甘苦を啜えてボヤいていたら――

「あーあ。こうしていれば甘苦の匂いに釣られてベカスさんが来るなんて事起きないか「よう絢斗」ウワツヒョイ!?」

ふと耳元で囁かれた低い声に飛び退き振り返ると、そこにはボロボロの黒コートにズボン。ボサボサの銀髪に赤銅色の目…ベカス・シャーナムがそこにいた。本人はニヤニヤ笑いつつ、その指先には絢斗が驚いた際に口から取りこぼした甘苦が摘まれている。

「べ、ベカス！ 何でここに…?!」

「なんでって、お前と同じ仕事だが？」

続けて困り顔で「花嫁の暗殺について、中々作戦が思いつかなくてなく 思考を切り替えるためにこの高台に来たんだが…」と言葉を切ると、再びニヤついた顔を浮かべ絢斗を見遣り腕を広げ――

「嬉しい事言ってくれるじゃないか！」ガバツ

「うわっ！ やめっ離せ！」

大仰な動作で絢斗に抱き付いた。勿論これに抵抗する絢斗だったが体格でも筋力でも負ける彼は抗議の声を上げつつもコレに甘んじる他なく、数秒抵抗した後本人もそれを自覚して降伏。ベカスにされるがままにされることを許容する。

一通り撫で回され満足したベカスに解放されフラフラとした動作で高台の手摺りに突っ伏した絢斗は「ゼー、ハー」と息を吐きながらもベカスに視線を合わせる。

「……急で悪いんですけど、依頼手伝ってくれませんか？ 金は出すんで」

「いいぞ」

「ええ…いや、まあ引き受けてくれるとは思ってましたけど即答ですか？もっと内容聞くとかは…？」

「オイオイ変なこと言うなよ。俺には『お前を助ける義理がある』んだぞ？」

「……………」

「まさか、『俺を助ける義理なんかないだろ』とか言うつもりですか？」

「ズルイですね…………」

「ハッ！ 言い出したのはお前だろうに」

「ち、違うない…！」

「声震えてるぞ？」

「…………取り敢えず、ついてきて下さい。概要を説明します」

「応。 つつても何処かの誰かみたいにA級傭兵じゃないからなー俺なー！」

「ハイハイその件については俺が悪うございましたッ!!」

依頼の協力を取り付けた絢斗と、協力の要請を受け付けたベカスは互いに肩を並べながら今もスロカイの眠るトウクトウクへと向かっていく。

「あ、これ返すぜ？」

「どーも…………残りはあげますよ。 マシにはなりましたけど、俺はやはりこの味苦手です」

「ホントか？ じゃあ遠慮なく…っつと」

ベカスは回収していた絢斗の噛み途中の甘苦を返し、絢斗はその礼にベカスへ残りの甘苦を丸ごと渡し（因みに元を辿れば絢斗がベカスに渡し忘れた物なので渡すことは当然なのだが、絢斗はベカスがそれを知らない事をいいことに言わなかった）、再び甘苦を噛み始めた。嫌いなら吐き捨てればいいのだが、引き取り先での躰で日ノ本特有の【モツタイナイ病】が軽く発現している彼は「せめて味が無くなるまでは噛み続けよう…」と絢斗は密かに決意し口内を襲う強烈な甘みを受

け入れる……まあ実情としては下手に地面に吐き捨てようものなら隣にいる甘さどころか原材料の木の味が無くなるまで噛み続ける甘苦ジャンキーが激昂し挙句の果てに「捨てるなら俺が噛む」と地面に転がったソレを噛み始めるからである。

「依頼の内容ですけど、」

「ん？」

「一言で言う——妹の為にカイ口中を駆けずり回れますか？」

「ああ成る程ね……決まってる」

簡潔なその一言から大方の事情を察したベカスは、クールに『フツ』と笑って見せると、「決まってる」と前置きし絢斗に言い放った。

「妹の為には何でもやるのが兄の務め……だからな？」

「…それだけ聞ければ十分です。…つかぬ事を聞きますが、腰の武器の手入れは万全ですか？」

「？ ああ勿論。つかやらないと師匠がな……」

「ならいいです」

脳裏に高出力ビームソードを構えた仮面の人物を思い浮かべる絢斗だが「まあ二対一なら抵抗できるだろ」とその場で深く考えるのは止め、ベカスとともに高台を去っていった。

ハイ、短めで申し訳ありませんがコレで今話は終了です。

え？ 普段1万字程度で終わってくせに何言ってやがるだつて？

(言ってるない)

そもそも投稿スピード遅いだろお前ハゲがハゲ散らかすよりも遅いぞ？ (言われてない)

表現も稚拙でそれを誤魔化すように特殊文字ばつか使ってるその甘ったれた文章が気に食わないと？ (辛口評価に定評のある友人の一言)

ダンクーガが超改造まであと一機足りないのもファイナルダンクーガと空呪羅と煌雷我の三機カットインで死人が出たのもお前の

せいだ？（初見時震えました）

.....。

なんだア？てめエ……（k o r o t u k i、キレた!!）

……まあ（三番と四番以外）全部自作自演なんですけどね初見さん！
（すみませんでしたm（ ）m）
ですが、個人的に「ちよつと短いかな？」と思ったのは事実です。あまり短過ぎるとアレですし……うーん。

……実は【アフリカ戦争編】が終わった後幕間^{インターバル}としてオリジナルの短編を書こうと思ってるんです。

まだ軽いプロット程度しか出来上がってない稚拙なものですが、せつかなのでここでご開帳したいと思います。

という訳で予告編どうぞー

【OATHカンパニー社員寮にて】

「ベカスさん。丁度暇になったので一緒に繁華街にで、も……!？」

とある昼下がり、絢斗がベカスを遊びに誘おうと向かったベカスの部屋には、青白い顔に手足を小刻みに震わせ倒れているベカスの姿があった。

「べ、ベカスさん!? メディック! メディック!!？」

ベカスと同じくらいに顔を真っ青にした絢斗が部屋を飛び出し大声を出し部屋から飛び出そうとした瞬間――

グウウウウウウウウウウ

「……………め、飯」

部屋の中央に（空腹で）倒れ（栄養失調で）青白い顔をしたベカスがそう呟き

「それと……、甘苦」

ついで（甘苦不足による禁断症状によって）震えた手を絢斗に伸ばした。

「どうしました絢斗君！」

「…何でもないですグリエーヴルさん。 大声出してすみません」

「えっ？ つてベカス!？」

「空腹で倒れてるだけみたいです。 食堂に連れて行きます」

桃色の髪と白衣を模した服が印象的な女性——グリエーヴルへそう返した絢斗は、死んだようなをしながらもベカスをその肩に担ぎ食堂へと連行…もとい誘導していった。

「……………先ず甘苦どうぞ」

普段は職員や一時契約した傭兵達によってワイワイガヤガヤと賑わっている筈の社員食堂は、今現在静寂に包み込まれていた。

「ウメツウメ……………!」

「…所属している人間は全メニュー半額つていい事だなー」

空になった皿の数を見ない事にするため、絢斗は「とりあえず…」と言いながら絢斗とベカスの側に積み上がった空皿を脇へと退かす。

「なんで栄養失調で倒れてたか、聞いていいですか？」

……………

「依頼がない？」

「ああ 何故だか最近Cランク：俺が受けられるレベルの依頼が粗方消滅しててな。 上のランクの依頼を受注しようにも、その時既に契約金を払う金すらも無くて八方塞がり。 で今日に至ったってワケだ」

膨らんだ腹を愛おしげに撫でるベカスは、テーブルの端に備え付けられている爪楊枝（味無し）で歯の隙間に挟まった食物を取りながらそう言った。

「…成る程。一日に述べ数十件の新規依頼が張り出されるCランクの依頼がないっていうのはにわかには信じ難いですけど…」

「まあこういう時は嘘をつかない性格でしょうし…信じます」と締め括り、脳内で原因を探る。

（傭兵需要の低下…ないな。多分だけど半世紀ぐらい経っても傭兵なり兵士なりの【武力】の需要はなくなるだろうし）

（高ランカーの依頼乱獲造語。本作では「上の階級の人間が下位の依頼を大量に受ける事と定義…もないな。最近ではCランクだけじゃなくてBランク上位にも毎月の依頼のノルマ達成が推奨されているし、月初めだからもう消化させたって奴はいない筈）

「一先ずは、俺と一緒に依頼を受けましょう。確か同行者が依頼の適切ランクだったら同行人は誰でもよかったはずですよ」

絢斗は素晴らしい携帯端末をベカスへ見せようとする——

「おい、アイツって……」

「最近話題の…？」

「ワーカーホリック「ワーカーホリック仕事中毒の疑いがある…？」」

「恰好がおかしい」

「《無形剣》」

にわかに食堂全体が騒がしくなり始める。

「…ん？ なんだなんだ？」

「ワーカーホリック「むぎようけん《無形剣》…ああ、最近話題の大型新人ですよ」ルーキー

頭の中に記された情報から話題の中心に居る人物を探し当てた絢斗は「ふう」と嘆息するし、面白く無さそうな仕草で手元の飲み物を消費する作業に没頭し始めた。

疑問に思ったベカスは「どうしたんだ？」と声をかけようとするが、直後飲み物を飲み込んだ絢斗が自身の口元に指を当てる——【静かに】というジェスチャーを見て、黙り込んだ。

「……………」

バリバリモシャモシャズー無言で食事を続けるといふ作者としては非常に描写に困る光景が数秒間続き、件の人物——黒寄りの深緑の髪が特徴的なスーツの男性が一定の距離まで離れると、「ズゾー」と不快な音を奏でていたストローから口を離し、話を続けた。「悪評や悪口を言うつもりはありませんが、人間何が地雷になるなんて分かったもんじゃないので聞こえない位置まで待ちました……………」つと、それである人の名前は【頃穂羅付望】ころほらつきもち何度呟いても違和感しかない名前の持ち主です」

「…まあ○ATHカンパニーこは住所年齢はともかく名前の規制は緩いですから、多分偽名でしょう」

「出て来たのはおおよそ一月前。初の依頼を大勝利に収めた後は、自殺願望の様な頻度で連続して依頼を受け続け今となっては一躍大型新人ルキって訳です」

何が思うところがあつたのか一息に絢斗そう捲し立てた。

「成る程…ん？ 『自殺願望の様な頻度で連続して依頼を受け続け』？」

「？ はいそうですけどそれが…って あー」

二人の頭の中で、『ベカスの依頼が激減』『期待の新人』『大量の依頼の受領』という三つの点が、線となって繋がる。

「……………なるほど、アイツですね」

「アイツだな」

そういい、絢斗とベカスは静かに頃穂羅の方へ向ける。ベカスは好奇の目から、少し恨みの籠った憎々しげな目を。絢斗は元から気に入らなかつたのか好奇と敵意半々から、そこそこ敵意へとシフトした忌々しげな目を向けた。

「……………」

視線を向けられた本人は、二人が視線を投げた瞬間ふと立ち止まりキョロキョロと辺りを見渡し始めた。

「……………」

しかし歴戦の傭兵として鍛えられて来た二人が駆使する巧妙な隠密を見破るまでには至らず、何より自分が頼んだらしき「コロツケそば」が受け取ると視線を受けていたことを忘れたかの様に軽快な足取りで席へと戻っていった。

「…ほーん。気付いたか」

「気配だけ、ですがね」

「フッフッフッフ…」

変なテンションのまま変な笑い声を上げる二人。ちなみに本命ターゲットの頃穂羅にこそ気付かれなかったが、二人の周囲にいた人々は不気味に笑いあう二人を見て少々距離を置いたとかなんとか。

【某国某市にあるマンションにて】

「…二人？ おかしいな、あのシーンならいるのは銀髪シヨタベコンホモカだけの筈」

男は、そう言うで一冊のノートを軽くパラパラと捲り始めた。

「うん。そうだよな…カルシエンやフリーズのアンデット小隊の面々やグリエーヴル、低確率で同行してるミドリやそれを上回る超超超確率のアイリ（スロカイ）も、あのシーンには出てこない…ウツドやハゲマファイアでもいたのか？」

「うーん」と悩ましげに男はそう呟くが、次の瞬間『パン！』と大きく手を鳴らし気持ちを切り替えた。

「下手に悩むのはナシだナシ！ この日に備えて道順チャートはちやーんと練って来たんだ！…やっぱダサイなこのシヤレ」

そういった男は、大仰な動作でモニター——そこそこ金が掛かっていると思わしきゲーミングPCに移るゲーム場面を指差し、堂々不敵に宣言した。

「俺のチャートは、崩れない!!」

男とPCの側には、現在プレイしていると思わしきゲームのパッケージが置かれており、その表紙には銀髪の男が駆る白い機体と、黒髪の女性が駆る黒い機体が激突している光景を背景に、物々しい筆記体でこう書かれていた。

【機動戦隊アイアンサーガ外伝 Your Saga】

次元違い（比喩にあらず）の男が描くレールをベカスは、そして絢斗は砕けるのか——！

【アイサガプレイ動画『ベカス打倒ルート』】

☆【作戦会議】

カルシエンの尽力によってカイ口内でもかなりの地位と栄華を誇る高級ホテルの（ベカスと絢斗は二人揃って「超高級ホテルの、それも満室時にスイートルーム取れるとかアイツ何者…？」と首をかしげたが。ありがたかったのは確かなので特に追及することもなかった）一室にてベカスと絢斗はウエルカムフルーツに齧り付きながら作戦会議を行っていた

「取り合えず俺は、例のバーに行ってみたいと思ってます」

「だな。俺もそれが最善だと思っている」

二人の脳裏には、場末のバーの奥で脚と手を組みながら蛇のような目付きでコチラを品定めしてくる一人の老人の姿を思い浮かべた。

「…正直あの狸爺に頼るのはまっぴらゴメンですけど、依頼達成出来ない方が問題なので飲み込みます」

「相変わらずあの人のこと嫌いなんだな。詳しく聞いたことなかったから聞くが…何があったんだ？」

「別に…：開口一番、俺の出自に対してイチャモンつけてきただけです」

「——なんだと？」

一瞬ではあるが、ベカスの顔が怒気に包まれる。

「気にしないで下さい…：言われた時こそ激昂しましたが、今は決着をつけました」

彼の脳裏にはくだんの「言われた時の激昂」を思い浮かべたのか組んだ手を僅かに力ませる。

「俺だけで行くか？」

「…の方が、いいかもしれませんね。足元見られた日にや今度こそキレそうです」

「そこまでか…：……」

ベカスは「あちゃー」とでも言いたげに手を額に当て天を仰いだ。

その後も話し合いは続き、決着は絢斗がホテルに残留。気絶中のア

イリ（スロカイ）の護衛……という名の待機。そしてベカスは件の老情報屋に話を聞かためホテルを後にすることになった。

「……ただあの人、情報一つでバカみたいな値段吹っ掛けてくるんだよなあ。情報の正確さを考えれば仕方のないことかもしれないが」

「そこは正攻法で突破します」

そう言った絢斗は懐からジャラジャラと『如何にも』な音を立てる頭陀袋を取り出し、ゆっくりと机に置く

「……えつーと、これは？」

「さつき下で卸してきた2000000ゴールド……惜しくはあります
が、必要経費です」

「いつの間に……」

「でも、出来るなら安く済ませてほしいです……まあそこは先輩の交渉術に期待します」

「ハッ……こんなの見せられたら、張り切らないわけにはいかないな？」

平時は己の信念から常に余力を残す後輩が見せる【本気】の目に多少なりとも感化されたベカスは、ニヤリと笑って見せる。そんなベカスに呼応するように絢斗もその瞳に怪しげな光を灯した。

「んじゃ……兵は拙速を尊ぶって言うからな。俺は今から行ってくる」

「了解です。アイリちゃんのご事は任せてください」

「応。頼む」

そう言ったベカスは「善は急げ」と早々に部屋から出ていった……片手に、後輩からの支援^{エール}を持ちながら。

「ふう。ベカスさんの方はこれでいいとして……問題は」

そういった絢斗は、自分の右耳に手をかける。ゆっくりと何かを引き抜くような動作をし手を開くと、彼の手には艶消しされた長方形の黒い物体があった。もう片方の手でソレを慎重に摘み上げると、己の特殊能力の一つである《コール》でピンセットを取り出すと、その小さな黒い物体からこれまた極小の平たい物体——マイクロSDカードを取り出し、そのままホテル備え付けのパソコンへぶち込む。

パソコンの〈PC〉から〈MSDカード〉をクリック。次いで出てきたパスワード入力画面に。……一度周囲を確認してからパス

ワードを入力しアクセスする。

黒い物質：実は彼の一日の行動を丸ごと記録するドライブレコーダーならぬくアクションレコーダーは、肉弾戦やBM戦闘の衝撃にも耐えきり、無事絢斗が望む映像をPCに映し出した。

——再生開始——

『依頼人の容姿や名前は？』

『悪いが、無理。教えられない』

——再生終了——

「もっかい」

——再生開始——

『依頼人の容姿や名前は？』（ry

——再生終了——

「も、もう一度…！」

——再生開始——

——再生終了——

「……1/20倍速でも見えない！」

PCの画面を食い入るように見つめていた絢斗だが、三度目で「ダメだ」と悟った彼は勢いよく立ち上がり「ウガァー!!!」と彼らしからぬ叫び声を上げると、そのままベットに倒れこみゴロゴロと転がり始めた。良く言えばく気分転換。悪く言えばく現実逃避である。

彼が悩んでいるのは、こうしてホテルに来る前：もつと言うとスロカイと合流する数時間前に遭遇し圧倒的な実力差を見せつけられた剣豪【パイモン】に関してのことだ。

（確証はないが、依頼を達成する過程で絶対にどつかでカチ合う気がする。……対策としては前回生身での戦闘で圧倒されたからBM戦——つて言いたいけど、あの人本職B.M.パイロットだよな）

冗談の様な強さから忘れそうになっていたが、彼の真骨頂はあくまで彼の専用機【マスター飛影】を駆るBM戦闘である：生身での戦闘はあくまで「サブ」なのだ。

「キツイなあ…流石はトップパイロット」

呆れる様に…または感嘆する様に深くため息を吐いた絢斗だが、こ

のまま「対策ムリ。ぶつつけ本番で行こう」という訳にもいかないため、何とかできないものかと思考を再開する。

(二手に分かれて片方を囷に…ダメだ各個撃破で終わる。ベカスさんも生身での戦闘が達者な方ではあるけど、アレに太刀打ちできるとは思えない)

上記の他にもへ現地地の傭兵を雇っての袋叩きへ目的地に赴く前の深夜に探し出して闇討ちといった意見が絢斗の頭の中で生まれたり弾けたりしたが、結局は「ターゲットの直線戦闘能力が高いため失敗の恐れあり」という身も蓋もない理由で脳内決議にて満場一致の否決と相成った。

「…やっぱ。真正面から行くしか無い、か」

その後暫くウンウン唸っていた絢斗は、ある意味での最適解を選択する事を決める。

「つてなると、アレの準備だな…出所が出所だからあまり使いたくはないけど」

絢斗はそう呟いた後。自分の荷物の一つであり…今回の依頼から一回も開閉されていない黒塗りのジュラルミンケースを取り出した。

「……『我らが道は自らが歩む為にあらず』」

彼が足元のケースを見てそう呟くと、『パシユン』という軽い音とともに、ケースがゆっくりと開き出した。

「あいつ変わらず悪趣味な言葉だ…やな事思い出した」

顔も顰めつつも、絢斗は静かにケースの中身を見つめる。

ケース内に入っていたのは、長靴を骨組みだけにしたらこうなるだろうと言った風の異形のブーツ。

もう一つはガントレット——丁度絢斗の腕の太さに御誂え向きなサイズに照準器の如きアタッチメントが付いた両籠手。

そして如何にも「危険です」と言わんばかりのドクロマークが、脳内の危険信号を否応にもなく刺激するタブレット型の錠剤。

最後に…青と赤の二本線が特徴的な一丁の小銃。

その姿を見遣り、ふと手を伸ばす絢斗。

『お前は機械だ』『なんでお前だけ』『どうして、どうして?』『戦闘機人』『頼むぜリーダー!』『どこのバカだ!』『実験は中止』『助け』

『■■■■——ッ!!』』

「…もう前のことだろうに」

目頭を抑える絢斗は、脳内に浮かんできた思い出を振り払うべく頭を振る。

「なんだ…乗り越えられてないじゃないか」

再びケースに手を伸ばした絢斗は、澱みなくケース内の装備を身につけておく。その動作は流れるように淀みなく——まるで幾千回も繰り返して来た動作をなぞっているかのようだった。

「装備完了っ」と

誰にいうまでもなくそう呟いた彼は、ふと立ち上がって、部屋に備え付けられていた鏡の前に立つ。

(まるで昔の再現だな…いや、ちょっとだけ殺気がとれたかな?)

多少は険がとれた自身の顔を見て苦笑いを浮かべて、絢斗は部屋で寝ているスロカイを起こさない様にゆつくりと部屋を出た。

……無論。スロカイのいる寝室から先は踏み入れた瞬間死が約束されたトラップルームに改造してから

「んー…ビツクリするほど手応えがない」

俺…芦名絢斗は、ベカスさん達と作戦会議をしたところとはまた別の酒場の中心に佇んでいた。

そこそこ広い酒場の中心はテーブルや椅子の一切が取り払われており、穴が空いた様なポツカリとした空間になっている。しかしそこに何もないわけではなく…俺の足元には、全身を使って「私達は荒くれ者でござい」と伝えてる粗野な男達が何人も横たわっている。

(ぶつちやけ使うまでもなかったな。出来ればあの二人に手合わせ願いたいんだが…)

事の発端は、今俺が居るこの酒場にナントカ…えっーとそうだ「砂漠の蜥蜴」だ。ソイツらが丁度俺に対して接客していた女性ウエイтрレスにちよつかいを出し始め、それで俺が注文したヤシの実サイダー

(カイロでは滅多になかったので結構楽しみにしていた)を入れたグラスを落としてしまった。

……これで荒くれ者が素直に謝って、頼んだ分を補填してくれたのなら、俺は特にいう事なかった。半分犯罪グループとは言っても同じ穴の貉…それに傭兵なんてのは荒くれ者でナンボみたいなどころもあつたので、俺自身イラついていたが許す用意もあつた。

しかしソイツは、謝るところかウェイターから頼んだ奴を聞き出し。あろうことが俺に向かって割れたグラスを投げつけてきやがった。

『ああ、それはダメだな』

元々取り出した武器の試験運用も終え、軽い高揚状態で普段より沸点が低くなっていた俺はそこでぶちのめす事を決めた。

ソイツらが店に入ってきた時見えない様に着用したコンバットグローブでグラスを打ち払うと、店から提供されたウエルカムスナックの「デザートナッツ」非常に硬い殻を持つ事で有名で、殻を砕くには専用の器具を必要とするのローストを殻付きのまま投擲。狙い通り額に当たり顔を抑える男の頭を引っ掴むと、意趣返しのため念も込めて男がぶちまけ床に広がるヤシの実サイダー目掛けて勢いよく振り下ろす。

『傭兵は中立だが…法破っていいってことではないよな?』

味方が一人倒され、そこで漸く俺の存在を認知した傭兵達が殺到してくる。

どこかから聞こえて来た「ヒュウ♪」という軽やかな口笛を皮切りに動き出した。近くにいたウェイターを押し除け、近くの席にいた只者ではなさそうな女性二人組に託すと、俺は抜刀してその刃先を傭兵の一人は突きつける。

「刃物を突き付けられる」という直接的な命の危機に思わず硬直した傭兵Aの隙を見逃さず——俺は出した刀を納刀して返す腕で殴り掛かった。

……いや流石にここで死人出す気はねえよ?

どこか安心した様な顔で倒れた傭兵Aを横目に、型もクソもない筋

力だけに任せたヤクザキックでAの背後にいた傭兵Bを蹴り飛ばす。たまらずよろけたBをタックルで突き飛ばし壁にぶつける。ある程度広いスペースを確保した後は、唯の蹂躪…いや作業だった。腕を振れば顎に当たり脚を払えば胴を薙ぐ、相手の連携の熟度も高くなく、ひどい時は同士討ちじみた事態にもなっていた。そうして出来たのが、さっきの光景というわけだ。

「…あー、なんかすみませんね同業者が」

「い、いえいえ！こちらこそ助かりました！」

取り敢えず被害に遭っていたウェイターと、店長と思わしき中年男性に頭を下げた。

相手からしたら俺もアイツらと一緒に店内を荒らした“無頼漢”である。最悪出禁と賠償金ぐらいは覚悟していたのだが。店のマスターに罵られるどころか感謝されてしまった…随分と人がいいらしい。

「——いや、だから壊したのは確かなんだから俺とアイツら（の財布から勝手に抜き取って）で払いますって。落とし前は付けさせてください」

「いえいえそうゆうわけには——」

「…何をしてるのかしらあの人は」

「バツからしい。払わなくていいなら払わなきゃいいのに」

押し問答をする俺と店主、呆れた顔を浮かべるお二人と変な光景は数分間続いたが。突如響いた重低音によってその空気は破壊された。

「…オイオイそんなに短気なのかアイツら」

「い、今のは!？」

「BMの駆動音…それも複数体だな」

音の正体を知った俺はポケットのメモ帳から一枚の紙を引き千切り、そこにカイロ警護隊への連絡先と俺の違約金受け取り用の口座へのパスを書き示し店主に渡す。

「店主さん。今すぐその電話番号に連絡、その口座の中から被害額分

と慰謝料持つてつて！」

おそらく原因は乱闘中に外へと逃げつつた奴が報告でもしたのだろう。だとしたら狙いは俺一人、万が一にでもこの店を潰されては困るので、俺は急いで外へと飛び出す——前に、咄嗟に振り抜き先程の女性二人へ向けて叫ぶ。

「あとそこのお二人さん！俺がダメだった時は店の守り頼む!!」

「ハアア？やるわけねえだ——」

「いいわよ」

「え、エレイン!？」

「貴方がもし負けても、私とセレニティが必ずこのお店を守るわ」

眼帯をした方は断ろうとしたが………というかアイツ『黒の猟兵』か。まじで俺何もしなくてよかったな………黒色の軍服みたいな服が特徴的な人が快く応じてくれた。

それを尻目に俺は加速し一際大きなテーブルを踏み越えて大きく跳躍。天窓を突き破り店の屋根へと着地する。

視線を上げた俺の目の前には、奴らの物であろう低ランクBMのツインアイと目が合った。

『ハハッ！ぺしゃんこにしてやるぜえー!!』

おそらくは乱闘騒ぎから逃げた傭兵の一人なのだろう。俺を見た瞬間BMの拳を振り上げ思い切り振り下ろした。

「ツチ——」

俺が舌打ちをすると同時にBMの拳が俺を屋根ごと押し潰す……直前に、ブーツから迸った衝撃波にのるように素早く横へ跳躍。別の屋根へと飛び乗った。

バ ガ ン ！

『ヒヤハハハ！俺たちに逆らうからこうなるんだよお〜!!』

勝ち誇った事が声音だけで分かる程度には沸き立っていた彼には悪いが、冷や水にかかってもらうことにした。

「生死確認は基本だろ？習わなかったのか？」

『なにい〜〜い!?!』

オープンチャンネルで話しかけると又もや如何にもな台詞を吐き、

俺を探そうとBMの首を振る。——生体レーダーでサーチすれば一瞬だろうに、何をしているんだろうか。

降って沸いた疑問を振り払い、頭を強く振る。「チャージは終わった。あとは唱えるだけだ」と己に言い聞かせ、その言葉を告げる

「《チェンジ》——パイモン！」

俺の景色がカイロの騒がしい街並みから一転、無骨な白一色のコクピットへと姿を変える。俺用に調節されたシートと操縦間の感覚を確かめ、パイモンの巨大な腕を相手のBMに突き出した。

『ぬぎゃああ!?何も無いところから——まさか、オメエわあ~~~~!!?』

『何でそういちいち三下みたいな反応してんだよ……』

相手の頭を掴み、生身での戦闘の再現とばかりに地面に擦り付ける。

(BM戦闘は想定外だけど……まあ問題はないだろ。前の盗賊団よりかは幾分か強いが、それだけだ)

建物を壊さない様に道路の場所を通りながら敵機に近付き、BM戦闘を開始する。

敵は複数機。多くはあるが軍勢というほどではない。最低限の良識はあるのか銃の類は持たず、拳やブレードで武装していた。

その事に安堵した俺は、一応実銃やレーザー兵器、そしてパイモンに搭載された電磁兵器の類をロックして(ないとは思うが万が一の暴発を防ぐためだ)、人間相手にする様に手をクイクイと曲げ挑発をかけた。

『……………いよー!』

俺に視線を向けていたBM達が数秒程硬直した後、堰を切ったように押し寄せた。

犇めき合いながらも向かってくるBM達は「鉄の津波」と形容しても良さそうなほどの威容であり、成る程大規模な傭兵団というのは嘘じゃないんだろう。

『オオオオオオオ!!!』

機体性能が上がるわけではないが、気持ちを昂らせるために咆哮。波に向かって突進する。

(全員を迎撃するのは不可能!だから——一点突破だツ!!)

FSシールドを全面に集中して展開。ブースター吹かし“面”ではなく“点”での突破を敢行した。

『——チエストオオオオ!!!』

体を捻って回転力をかけての飛び蹴りが炸裂する。スリムな体がかえって活かされたのか、俺の蹴りは敵BMの波を俺が通る部分だけ一気呵成に貫き通した。ある機体は体に罅が入り、またある機体は激突時のインパクトによって関節があらぬ方向に捻じ曲がり、そしてまたある機体は胸部装甲が陥没した。

突進の勢いを殺すために地面を両足だけではなく両腕も使い獣のような姿勢で衝撃を吸収し止まる。パイモン格闘型の腕部の爪形プロテクター独自設定での名前なのでなのであしからずでやるとますます獣っぽいなと思いつつも上体を起こし構え直す。

『なんなんだアイツは?!』

『おいお前行けよ………』

『イヤに決まってんだろっ、お前こそ行け!』

『どっから出てきやがった!!』

敵は完全に混乱しているらしく、この好機を逃がすほど俺は愚鈍ではない。

『来ないなら、俺から行くぞ!』

跳躍し敵の団体へと飛び込む、量より質の時代ではあるが未だ数の力は偉大だ。混乱が解けて連携をとられる前にケリをつける………!

☆【虚栄】

『貴方がもし負けても、私とセレニティが必ずこのお店を守るわ』

(つて言ったけど、この分なら助けは必要なさそうね)

衝撃と轟音に怯える店員と他の客を宥めながらも、エレインはそう判断した。

砂漠の蜥蜴団の横暴な態度に腹を据えかねた(仲間のセレニティは違ったようだが)エレインだが、彼女が手を出す前に彼女達の近くに

いた男性が一足早くキレ、傭兵達と乱闘を開始した。半ば自動的に腰のサーベルに手が伸びた自分に疑問を覚えながらも隣のセレニティに「手助けしましょう」と耳打ちするが、エレイン以上に真剣な目つきで男性を見つめていたセレニティの「その必要はなさそうね」と言う声で制止された。

思わず眉を顰め語気を強く再び言おうとしたエレインだが、その直前店内に響いた『ゴシヤア!』と言う音に反応し、その方向に首を向けた。

すわ飛び出した男性が強く殴られた音かと後悔の念を持ちつつ振り抜いた先の光景は——自分より縦にも横にも大きい傭兵の頭を掴み地面に叩きつけた件声名 絢斗の男性の姿だった。

微かに目を細め「ヒユウ♪」と称えるような雰囲気のセレニティが放った口笛が合図だったかのように、絢斗は動き出す。乱闘の側にしたウエイターを自分たちの方へ避難させた後はまさに蹂躪だった。

瞬く間に傭兵達を伸した絢斗は、戦い足りないと言っても言うように軽く拳を振ると、その視線を自分たち——正確には結局最後まで傍観していたセレニティ——を一瞬だけ見遣るが、すぐさま店の店長達への謝罪へ移っていった。

そして、店の保護と防衛を任せ。彼は店の天窓から外へ飛び出していった……という訳である。

因みにだがセレニティは現在一番外に近い窓の近くで己の半身である黒い銃剣の感覚を確かめながら店の外に目を光らせていた。

絢斗外に飛び出した時点では「なーさっさと帰っちゃまおうぜ〜?」と駄々を捏ねていたセレニティだが、エレインの「お願い」と言う声に負け今は渋々店の護衛に当たっていた。

「そっちはどうかしら、セレニティ」

「問題なさそうだよエレイン。最初の一点突破こそ怪しかったがその後はぜんぜん。ピンチに陥る心配すらないわねー」

「そう。なら良かったわ」

エレインもふと外を見るが、ちょうど彼が操る。自分にも見覚えが

ある《パイモン格闘型》の右ストレートが敵機のメインカメラを潰し、そのまま頭部を吹き飛ばしたところだった。

遮蔽物を使って敵を分断し、一対多ではなくあくまで一対一を連続で行い撃破する。複数人に囲まれた際は無理せず後退し再び分断にはしる……とどこか作業的な印象も受ける淡々とした戦闘行為は、自己流の戦いをする者が多い傭兵としては異質で、まるで厳しい訓練を重ねた軍人のような雰囲気すら浮かべている。

もし彼が見た目通りの年齢ならあそこまでの練度になるには——
——と考えたところでエレインは思考を打ち切った。

「流石に失礼ね……」

連想ゲームの類ではあるが邪推が過ぎると己を諫め、自戒の念をこめて自分の頭をコツリと叩き、エレインはより一層周囲への警戒に力を入れ始めた。

「見覚えがあると思ったら、アイツ【AAエース】ね」

セレニティは窓の外で戦う絢斗をみてその正体を言い当てた。そもそも絢斗自身その純朴な性格と目立つ髪色と容姿、そして何よりその強さから会社の広告塔として登用される事も多く、ランクが上がるにつれ秘匿性が上がる傾向にある職業についている者としては一般人への認知度が高い方ではあるのだが。自分たちとその組織へ何かしらの影響力を持つ人物では無いが、それでも有名パイロットの情報には彼女の頭の中にしつかりと残っていた。

「単なる神輿役かと思っただけど、意外とやるのね」

実の所絢斗が戦い始める前までセレニティは「芦名絢斗」と言う存在を認識していなかった。いや……正しく言うなら戦い始めた時点でさえも『なかなか腕の立つ奴』としか思っていなかった。(まあこれは彼女の脳内タスクの優先順位が何に置いても「エレインLOVE!!」だから仕方ないのだろうか)

セレニティが初めて『コイツは芦名絢斗だ』と認識したのは、乱闘

が終わり倒れ伏した傭兵たちの中心にいた絢斗がセレニティに視線を向けた時だった。

——突然だが害意、敵意、殺意、怨恨、恨みと言った人に向けてマインスのイメージを叩き付ける感情の類は概ね『激情』に区分される。そして激情とは「激しい情緒」という意である。瞬間湯沸かし器のような短い時間か、カイロのような緩くも長い続くのかは個人によるだろうが……つまり何が言いたいかと言うと個人差はあれどその手の感情には何かしらの燃え盛るモノが介在するはずなのだ。

だが絢斗がセレニティに向けた視線の中には……そのような「熱」が一切無かった。

シュレッダーに入れるべき屑紙を見つけたような、料理に使うために切り分けるための肉類に見るような。「闘争」というよりかは「処理」のような印象をセレニティに与えた。その時、一瞬だけだが確かに……セレニティは絢斗を「恐ろしい」と思った。

その際の状況を思い出し、セレニティは己の相貌が釣り上がるのを自覚し……戦闘狂である己の黒い、その中でも更に黒い部分が鎌首をもたげるのを自覚した。

……戦ってみたい。

セレニティがそう思った瞬間、最後の敵機が崩れ落ちた。

BMの裏から出てきたパイモンと、そこから降りてきた絢斗は、ゆっくり此方に近付き——

「依頼頼んだ後で悪いんだが……もう一個頼んじやダメか？」